寝屋川市文化財資料25

楠（くすのき）遺跡 Ⅱ

ー共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書ー

2001.3

寝屋川市教育委員会

土製鋳型外枠

同上（裏面）

高杯状土製品

赤色顔料の付着した土器（左列４・５・７，右列101・102・102'）

序

寝屋川市楠遺跡は、本市石津南町に所在する弥生時代・古墳時代の集落遺跡です。遺跡付近には、現在でも茨田郡条里の痕跡が南北・東西方向の道路や水路などに認められる地域です。平成元年の宅地造成に伴う確認調査で、この地に条里より古い古墳時代の遺跡が埋没していることがわかりました。平成3年の共同住宅建設に伴う遺跡地内での初めての本格的な発掘調査で、古墳時代中期～後期の集落跡が見つかりました。この時に出土した大量の遺物の中には朝鮮半島との関係の想定されるものが含まれていました。こうした発掘調査成果は、本市教育委員会が主催した平成8年度歴史シンポジウム「失われた古代の港」でも渡来人の住んでいた集落として取り上げられ、寝屋川市さらには北河内地域の古墳時代を考える上で重要な遺跡であることがわかりました。

今回の調査地は遺跡の南側にあたる地域で、平成12年2月に共同住宅建設に伴って確認調査を実施した結果、遺跡の広がりが確認されました。平成12年4月末～6月末に記録保存を目的に実施した発掘調査では、これまで知られていた古墳時代の集落跡のほか、弥生時代の集落跡が存在することがわかりました。また、弥生時代の青銅器の製作に関係する遺物がまとまって出土し、遺跡内で青銅器の製作が行なわれていたことがわかり、大きな話題となりました。

本報告書は、本年度に実施した発掘調査と、引き続き行った遺物整理作業の概要をまとめたものです。本書が、地域の歴史研究の基礎資料として活用され、歴史や文化財に対する理解を深めるための一助となることを切に希望します。

なお、調査の実施にあたりましては、発掘調査および遺物整理の費用負担をはじめ多大なるご協力を賜りました株式会社三洋エステートをはじめ、お世話になりました関係機関・関係各位に厚くお礼申し上げます。また、発掘調査・遺物整理に携わった方々に深く感謝の意を表します。

寝屋川市教育委員会では、私たちの祖先が残しあるいは受け継いできた様々な文化財の保存をはかり、私たちの子孫に伝えていく所存です。今後とも、本市文化財保護行政に、ご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成13年3月

寝屋川市教育委員会
教育長　鈴木　隆

例　　言

1．本書は、共同住宅建設工事に伴って実施した、寝屋川市石津南町所在の楠遺跡の発掘調査概要報告書である。

2．発掘調査および出土遺物整理は、株式会社三洋エステートの依頼を受けて、寝屋川市教育委員会が実施した。

3．発掘調査および出土遺物整理に要した費用は、すべて株式会社三洋エステートが負担した。

4．現地での発掘調査は、平成12年4月27日から開始し、同年６月30日に終了した。

5．本書の作成にかかる出土遺物等の整理作業は、平成12年10月13日から平成13年３月27日までの間、寝屋川市立池田第二小学校余裕教室において実施した。

6．現地調査・遺物整理は、寝屋川市教育委員会文化振興課文化財保護係濱田延充が担当した。調査の実施にあたっては、文化財保護係主査塩山則之の指導・協力を得たほか、調査事務等については文化財保護係山本五月の協力を得た。

7．本書の編集・執筆は、濱田が行った。また、本書に掲載した図面の作成・浄書については、濱田のほか調査補助員があたった。

8．現地調査および出土遺物の整理・本概要報告書の作成にあたり、下記の方々にご指導・ご教示を賜った。（順不同・敬称略）

瀬川芳則（関西外国語大学・寝屋川市文化財保護審議会会長）、喜谷美宣（大阪国際女子大学）、広瀬和雄（奈良女子大学）、酒井龍一（奈良大学）、田崎博之・吉田　広（愛媛大学）、松木武彦（岡山大学）、桑原久男（天理大学）、楠宜田佳男（文化庁）、大野　薫・森井貞雄・宮崎泰史・山田隆一（大阪府教育委員会）、難波洋三（京都国立博物館）、三木　弘（大阪府立弥生文化博物館）、宮井善朗（福岡市立博物館）、林　大智・久田正弘（石川県埋蔵文化財調査センター）、石黒立人（愛知県埋蔵文化財調査センター）、西　邦和（能登川町教育委員会）、進藤　武（野洲町教育委員会）、藤田三郎・豆谷和之（田原本町教育委員会）、田中清美（大阪市文化財協会）、三好孝一・若林邦彦（大阪府文化財調査研究センター）、濵野俊一（茨木市教育委員会）、森岡秀人（芦屋市教育委員会）、篠宮正（兵庫県教育委員会）、加藤良彦（福岡市埋蔵文化財センター）、平田定幸・境　靖紀（春日市教育委員会）

9．調査に参加したのは、下記の方々である。（五十音順・敬称略）

［調査補助員］石本アツ子、谷本由紀、永尾衣利

［内業作業員］浅野美佐子、大久保　貢、須崎美千代、竹内節子、藤戸房江、光弘　修

10．本書に掲載した土器の実測図は、断面黒塗りで須恵器を示し、それ以外は断面白抜きとした

11．本調査において得られた出土遺物および調査において作成した写真・実測図等の記録資料は、寝屋川市教育委員会で保管している。歴史資料として、広く活用されることを希望する。

目　　次

第Ⅰ章　調査に至る経過 …… 1
第Ⅱ章　調査の経緯 …… 3
第Ⅲ章　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 5
第Ⅳ章　調査の成果 …… 7
　1．基本層序 …… 7
　2．検出された遺構 …… 8
　（1）Ⅰ区 …… 8
　　【弥生時代】 …… 8
　　【古墳時代】 …… 10
　（2）Ⅱ区 …… 12
　（3）Ⅲ区 …… 14
　3．出土した遺物 …… 14
　（1）弥生時代 …… 14
　　【弥生土器】 …… 14
　　【土製品】 …… 17
　　【石器】 …… 18
　（2）古墳時代 …… 19
　　【土器】 …… 19
　　【石製品】 …… 21
　（3）動植物遺存体 …… 22
第Ⅴ章　まとめ …… 24

挿 図 目 次

第1図　調査地位置図 …… 1
第2図　周辺遺跡分布図 …… 6
第3図　堆積土層柱状模式図 …… 7
第4図　Ⅰ区遺構配置図・東西壁断面実測図 …… 9
第5図　1区土坑1・土坑5平面・断面実測図 …… 11
第6図　Ⅱ区遺構配置図・東壁断面および柱穴東西断面実測図 …… 13
第7図　Ⅲ区遺構配置図・西壁断面実測図 …… 15
第8図　弥生時代および古墳時代石製品実測図 …… 22
第9図　鳥足文タタキ目をもつ土器実測図 …… 23

図 版 目 次

図版１　検出遺構（１）ａ調査地遠景，ｂ調査地全景
図版２　検出遺構（２）Ⅰ区全景
図版３　検出遺構（３）Ⅰ区土坑１
図版４　検出遺構（４）Ⅰ区土坑１遺物出土状況
図版５　検出遺構（５）Ⅰ区溝３，Ｐ－33
図版６　検出遺構（６）Ⅱ区全景
図版７　検出遺構（７）Ⅱ区掘立柱建物柱穴
図版８　検出遺構（８）Ⅲ区全景
図版９　出土遺物（１）弥生土器
図版10　出土遺物（２）弥生土器・土製品・石器
図版11　出土遺物（３）高杯状土製品
図版12　出土遺物（４）高杯状土製品
図版13　出土遺物（５）土製鋳型外枠
図版14　出土遺物（６）土製鋳型外枠・スサ入り粘土塊
図版15　出土遺物（７）Ⅰ区土坑１出土石類
図版16　出土遺物（８）古墳時代土器
図版17　出土遺物（９）古墳時代土器・製塩土器
図版18　出土遺物（10）初期須恵器
図版19　出土遺物（11）韓式系（軟質）土器
図版20　出土遺物（12）ａ.古墳時代石製品，ｂ.動植物遺存体
図版21　弥生土器・土製品実測図（１）
図版22　弥生土器実測図（２）
図版23　古墳時代土器実測図（１）
図版24　古墳時代土器実測図（２）
図版25　古墳時代土器実測図（３）
図版26　青銅器鋳造関連遺物実測図
図版27　調査区および遺構配置図

第Ⅰ章　調査に至る経過

楠遺跡は、寝屋川市のほぼ中央部に位置する遺跡である。遺跡の範囲は、石津南町～石津東町に広がると推定されている。遺跡の周辺では、道路や水田地割よりほぼ正方位の条里が復元されており、茨田郡条里遺跡の一部となっている。平成元年（1989）に、石津南町（今回の調査地東側）で、分譲住宅開発に伴う確認調査の際に古墳時代の土器が出土し、条里より古い古墳時代の遺跡の存在が明らかとなった。寝屋川市教育委員会は、調査地の周辺を古墳時代の遺跡とし、付近の小字名より「楠遺跡」と命名して文化財分布図に登録した。

平成３年（1991）には、今回の調査地北側で共同住宅建設に伴う発掘調査が実施され、古墳時代中～後期の集落遺跡が検出された。古墳時代中期の集落では、初期須恵器・韓式系土器（軟質土器）・陶製紡錘車・陶製土錘が出土した。これらの遺物は、朝鮮半島との深い関わりを示すものと注目され、平成９年に行なわれた歴史シンポジウム「失われた古代の港」でもパネラーの諸先生から渡来人の居住が極めて濃厚な集落遺跡との指摘をいただき、寝屋川市の古墳時代を代表する遺跡となっている。

第１図　調査地位置図（S＝1／2,500）

今回の調査地は、遺跡の範囲の南側に位置する。平成12年１月21日に株式会社三洋エステート（代理人：株式会社RYU設計・株式会社長谷工）より、寝屋川市教育委員会文化振興課に調査地での共同住宅の開発について事前の相談を受けた。教育委員会は、開発対象地が遺跡内にあることから、文化財保護法第57条の２に基づく届出の提出とともに、工事によって遺跡の損壊が想定される部分には発掘調査が必要であるとの説明を行った。同年１月28日付けで、同社より「埋蔵文化財発掘の届出」が提出され（１月31日付けで受理）、続いて２月８日付けで「埋蔵文化財確認調査依頼書」が提出された。

２月10日に開発対象地に２m×２mの調査区を４箇所設定し、遺構・遺物の有無の確認調査を実施した。その結果、４箇所全ての調査区で古墳時代の遺物が出土し、２箇所の調査区では壁面で遺構が確認された。寝屋川市教育委員会では、２月18日付けで確認調査報告書を開発者（代理人）に通知し、開発対象地に遺跡の広がりが確認できたことを報告すると同時に、工事によって遺構の損壊が想定される部分について発掘調査の実施を指示した。その後、寝屋川市教育委員会が発掘調査を実施することで、調査の時期・方法等について協議がもたれ、平成12年４月14日付けで開発者と寝屋川市教育委員会の間で「埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」が交わされた。この協定書をもとに現地での発掘調査を行うこととなったが、調査の早期着手・完了のため、開発者側で調査に必要な作業員等について用意し、教育委員会に提供いただくことで調査を実施することとした。

発掘調査は、工事によって遺構の損壊が想定される共同住宅本体部分・駐車場ピット部分・貯留漕部分について遺構の記録保存を目的に行った。なお、開発対象地には旧社員寮（鉄筋コンクリート３階建て）の構造物が遺存しており、調査対象区域の一部がかかっていたが、解体および建築工事との関係で、解体工事以前に発掘調査を実施し、建物にかかっている部分については解体時に追加調査を行うことした。また、この建物の１階の一部を、発掘調査の現地事務所として利用することとし、現地での発掘調査を４月27日に開始した。

発掘調査は、６月30日に終了し、その後、協定書に基づいて出土遺物の整理と概要報告書の作成について協議がもたれた。協議の結果、寝屋川市が受託事業としてこれらの作業を行うこととなり、寝屋川市議会９月定例議会で補正予算の承認を得ると同時に、10月４日付けで開発者と寝屋川市で契約を交わした。遺物整理作業は、10月13日より市立池田第二小学校余裕教室で開始し、翌平成13年３月27日に本概要報告書の刊行をもって終了した。

なお、今回の調査成果をもとに３月９日に、市立エスポアールで歴史シンポジウム「青銅器の生産と弥生社会～楠遺跡の青銅器鋳造関連遺物をめぐって～」を開催し、当日は市民を中心に100名を越える参加者があった。

第Ⅱ章　調査の経緯

現地での発掘調査は４月27日より着手し、調査区の位置を確定後、表土・旧水田耕土層および無遺物層の機械掘削による除去を開始した。３箇所の調査区の調査を同時並行で進めたため、調査地内での掘削排土の仮置場の確保が困難となり、機械掘削排土の2/3については調査地外に搬出を行った。

機械掘削完了後、人力による遺物包含層の掘削および遺構の検出・掘削を行った。遺物包含層を掘り下げたところ、遺構面のベースとなるシルト～細砂層から湧水が認められた。特にⅠ区北側・Ⅱ区南側・Ⅲ区では吹き出すような激しい湧水のため遺構面が沼状に軟質化したため、調査困難な状態となった。このため、数箇所にドラム缶を利用した簡易の排水用井戸（ウェル）を設置し、常時排水を行いながら調査を進めた。検出された遺構の測量については、調査期間短縮のため、ヘリコプターによって上空から撮影した航空写真より1/20および1/100の図化を行った（株式会社・かんこうが実施）。このほか、調査区周壁の土層断面や遺構埋土の堆積状況等については調査補助員等による人力の図化を行った。また、主要な遺構・遺物の検出状況については、35mm小型カメラを使用して白黒ネガフィルムおよびカラーポジフィルムで撮影を行った。

調査の終盤は梅雨入りし、降雨のため調査区周壁の崩落などのトラブルが多く発生したが、６月16日にヘリコプターによる測量用の写真撮影を行うことができた。また、Ⅰ区南側の土坑１より、弥生時代の青銅器鋳造関連遺物（土製鋳型外枠２点および高杯状土製品）が出土した。このため、６月22日に調査成果について報道記者発表を行い、６月24日午後に市民向けに遺跡現地説明会を開催して、発掘調査現場の公開と出土遺物の展示を行った。現地説明会には、寝屋川市民を中心に約170名の見学者があった。現地での発掘調査は６月23日に完了し、６月26日より埋め戻し作業を開始し、６月30日に現場事務所を撤収し、現地調査を終了した。

協議の段階で、基礎工事着手時に立会調査を行うこととした共同住宅北端（１区北側）の部分については、12月４日に立会調査を実施した。旧社員寮の基礎により損壊を受けていたが、Ⅰ区溝６の北側の延長と想定される部分で、若干の古墳時代中期の土器を採集した。

発掘調査によって出土した遺物の整理作業については、現地調査中に遺物の洗浄を完了しており、以後の作業について実施した。10月13日より市立池田第二小学校４階の余裕教室を出土遺物整理室として作業を開始し、出土遺物の注記・接合・復元、さらに主要な遺物の実測・整図・写真撮影、および現地調査時の記録の整理を行い、平成13年3月27日に本書の刊行をもって完了した。

発掘調査現場作業の経緯（「発掘調査日誌」より）

４月27日　Ⅱ区より機械掘削開始。
　28日　Ⅱ区機械掘削完了、人力での側溝の掘削。Ⅰ区機械掘削開始。
５月１日　Ⅱ区西・北壁が湧水のため崩壊。
　２日　Ⅱ区遺物包含層の人力掘削開始。明日より連休となるので作業場所の整理整頓を行う。夕方作業終了後、激しい雷雨・ひょうが降る。
　８日　作業再開。Ⅱ区は湧水のため遺構面（第Ⅵ層上面）が軟質化し調査困難。
　　Ⅰ区の機械掘削は3/4が完了。ダンプでの廃土の搬出は本日で終了。
　９日　Ⅰ区機械掘削。南側より側溝の掘削に着手。
　10日　Ⅰ区機械掘削完了。引き続き、Ⅲ区の機械掘削にも着手し、完了。
　11日　Ⅲ区遺物包含層の掘削完了。土器は、コンテナ1箱程度出土。Ⅰ区遺物包含層の掘削。
　12日　Ⅰ区南側より、遺物包含層の掘削および遺構面の精査。南西部分で遺構検出。Ⅲ区遺構面の精査。
　15日　水中ポンプの故障のため、週末の降雨で現場はプールと化す。Ⅰ区南東壁崩壊。補助員３名が参加。
　16日　Ⅱ区遺物包含層の掘削。

17日　Ⅱ区遺物包含層の掘削がほぼ完了。Ⅱ区東壁の精査・写真撮影。

18日　昨夜、激しい降雨。水準点設置。Ⅰ区南側より遺構面を追っかける形で第Ⅴ層下部を除去していく。遺構面は南西が高く北東が低くなることが判明。南側で弥生土器の底部が出土。Ⅱ区東壁を断面実測。

19日　Ⅰ区東西壁を断面実測。夕方から雨が降り始める。

22日　Ⅰ区第Ⅴ層下部の掘削完了、遺構面精査を開始。南西部の遺構を掘削。

23日　Ⅰ区中央～北の遺構面の状況がわからないため、調査区中央に東西方向のサブトレンチを設定する。調査区中央で北西～南東方向の厚い砂の堆積を確認。

24日　昨日Ⅰ区で検出した砂層の堆積状況を確認するために、砂層に直交する北東～南西方向のサブトレンチを南北２箇所に設定する。

25日　設定したサブトレンチにより、Ⅰ区調査区北側は遺構面が北東方向にさらに下がっていくことが判明。第Ⅴ層最下部として遺物包含層の掘削を行う。南西部の遺構の断面実測、写真撮影。

26日　Ⅰ区北側中央で遺物包含層を除去すると吹き出すような出水。ここから初期須恵器の甕形坏が出土。

29日　Ⅰ区南東部分の壁が崩落。北側の湧水が止まらない。この部分で古墳時代中期の遺物が多く出土しているので、沼状となっている調査地で調査補助員に遺物採集を行わせる。

30日　Ⅰ区南東部分の遺構掘削。弥生土器のみ出土する溝・土坑があることがわかる。円形の土坑（土坑１）から、かまぼこ形の土製品出土、鋳型か？損壊の著しいⅡ区の周壁を機械で法面をつけて整形。

31日　雨天のため作業中止。Ⅰ区北側の湧水が止まらないため、北東隅にドラム缶を利用した井戸を設置し、強制的に排水を行う。北側中央の壁が崩落。

6月1日　Ⅰ区南側中央の壁が崩落。Ⅰ区の側溝を掘り直し。井戸のおかげで調査区北側の湧水が止まる。

2日　Ⅰ区南側から遺構面精査。中央西側の遺構を検出、掘削。

5日　Ⅰ区中央部の遺構検出・掘削。Ⅰ区の成果に気を良くして、Ⅱ区・Ⅲ区にも排水用井戸を掘削。

6日　Ⅰ区北側の遺構検出。中央から南西方向の古墳時代中期の浅い溝を検出。須恵器異形坏などの遺物はここから出土したものと推定。Ⅱ区も水が抜けて、遺構面の精査を行う。

7日　Ⅰ区北側の遺構掘削。Ⅱ区建物１棟分の柱穴検出、ただちに掘削し、写真撮影・断面実測を行う。

8日　Ⅰ区遺構面の平板測量、遺構番号を付けて遺物を取り上げる。Ⅱ区遺構完掘、遺構面の清掃を行い、北側の廃土の山の上から写真撮影。午後、（財）大阪府文化財調査研究センターの三好孝一・若林邦彦・村田幸子の３氏が来訪。土坑１とかまぼこ形土製品についてご教示いただく。

9日　雨天のため、Ⅰ区の側溝の手直しをして、作業中止。調査補助員は、土器の洗浄。

12日　Ⅰ区遺構面精査。南側の土坑１の写真撮影・断面実測。Ⅲ区遺構面検出作業。午後、茨木市教育委員会の濱野俊一氏来訪。

13日　Ⅰ区壁面仕上げ。土坑１土層観察用に残していたセクションをはずす。ここから、先に出土していたかまぼこ形土製品と同じものが出土。さらに多孔の高杯状土製品が出土。かまぼこ形土製品は、一対の土製鋳型外枠の可能性高まる。

14日　Ⅰ・Ⅱ区遺構面清掃。Ⅲ区遺構面精査、遺構検出。午後、大阪府立弥生文化博物館の三木弘氏来訪。青銅器鋳造関連遺物等についてご教示いただく。

15日　Ⅰ・Ⅱ区航空写真の準備で遺構面清掃と遺構に石灰で白線のマーキング。Ⅲ区は遺構掘削。夕方、天理大学の桑原久男氏来訪。

16日　作業員・濱田は午前７時30分から航空写真撮影の準備。ヘリコプターによる写真撮影は、11時に無事終了。Ⅰ・Ⅲ区の写真撮影を行う。昼前に関西外国語大学の瀬川芳則氏・大阪国際女子大学の喜谷美宣氏が来訪。午後２時～３時には成美小学校６年生（67名）が見学に来る。

19日　濱田は市長・議会関係者（議長・副議長・文教常任委員長）に調査成果の説明に行く。Ⅲ区の遺構面を精査し、遺構の再検出を行う。Ⅰ区の東壁を追加で断面実測。Ⅰ区西壁が大規模に崩壊。

20日　Ⅰ区西壁を機械を使って復旧。北東隅は危険なため埋め戻す。Ⅱ区埋め戻し開始。Ⅲ区遺構検出。

21日　午前中降雨。Ⅲ区遺構掘削、遺構面清掃。

22日　Ⅲ区写真撮影、終了後埋め戻し開始。午後、濱田は青銅器鋳造関連遺物の出土をメインに調査成果の発表のため、枚方市役所の記者クラブへ。電話取材等に対応のため、濱田は午後８時前まで残る。

23日　翌日の現地説明会の準備。午前中に関係者向けの説明会実施。

24日　午後１時30分より現地説明会を開催。参加者は市民を中心に150名を超える。

26日　Ⅰ区埋め戻し開始。Ⅰ区南側の弥生時代の遺構の再チェック。南東隅で土坑23（弥生時代）を検出。

30日　現地調査事務所を撤収。

第Ⅲ章　遺跡の地理的・歴史的環境

寝屋川市の西側の地域は、淀川が運搬した大量の土砂の堆積によって形成された低湿な平野が広がっている。淀川は京都府南部の巨椋池から男山～大山崎間を抜けて枚方丘陵の北辺部を巡るように流れる。この間、南からは船橋川・穂谷川・天野川といった支流が合流する。香里丘陵を抜けると一転し、分流を形成し、堆積作用によって三角州を形成させる。この分流の一つの起点は寝屋川市木屋～太間付近と考えられる。ここから南への分流は古川と呼ばれており、古代以降茨田郡となる淀川左岸の低地帯を流れる。古川は、豊臣秀吉が築いたとされる文禄堤によって淀川と分離され、以後寝屋川市西部の旧九個荘村に属する村々の水田の悪水（排水）路として永らく利用されてきた。

古川は、寝屋川市太間付近で淀川より分流し、寝屋川市西部を南北に流れ、門真市大和田付近で西流した後、さらに門真市南部を南流して現在は大阪市茨田安田付近で寝屋川に合流する。かつては河内湖に注いでいたのであろう。寝屋川市域での古川の流路については不明な点が多い。これは、上記の文禄堤の築堤によって淀川から分離したため、水源が無くなったからである。古川の流路については、寝屋川市池田の北で分れる３つの流路があったことが、小字の調査等で明らかになっている。ただし、この３本の流路が併存していたのか、あるいは別々の時期のものかは明らかではない。また、近年の試掘・確認調査で、埋没河川と思われる厚い砂層が確認される地点が見つかっている。

調査地周辺の現在の標高は約４ｍで、極めて低い。昭和30年代以降の住宅開発以前は、調査地付近に寝屋川市北部の旧友呂岐村の悪水が集められて友呂岐悪水路に流入するようになっており、この地域は洪水の度に冠水していたそうである。

次に、楠遺跡周辺での歴史的環境を概観しておく。楠遺跡では今回の調査で弥生時代後期初頭の集落が確認できたが、周辺では弥生時代以前の遺跡は確認されていない。少し範囲を広げて淀川左岸下流域（与旧茨田郡域）での人々の生活の痕跡が確認できるのは、弥生時代前期末～中期初頭で、大阪市森小路遺跡・守口市八雲遺跡・門真市古川遺跡・同市普賢寺遺跡・大東市西諸福遺跡が知られている。生駒山麓部に存在する寝屋川市高宮八丁遺跡・四條畷市雁屋遺跡のような弥生時代前期中頃以前に遡る遺跡は、確認されていない。これらの遺跡は淀川や古川河口部の前面に立地しており、当該期に低地部分への人々の進出が認められる。これらの集落は森小路遺跡を除くと中期中頃までには衰退・消滅し、長期に継続する遺跡は認められない。

この地域に再び遺跡が出現するのは、中期末～後期初頭である。寝屋川市域の古川流域の池田西遺跡（中期末～後期初頭）・池田下村遺跡（中期末）・茨田郡条里（池田川村）遺跡（中期末）・高柳遺跡（後期初頭）・楠遺跡（後期初頭）で当該期の集落が検出されている。池田西・高柳の両遺跡では竪穴住居跡が検出されている。各遺跡とも遺物量は多くなく、短期間に営まれたようである。後期中頃以降に出現する遺跡はなく、この地域全体では遺跡の空白期を迎える。

古墳時代に至っても、この地域では前期の遺跡が未発見で様相は不明である。古墳時代中期以降には、数多くの遺跡が出現する。寝屋川市楠遺跡・池田下村遺跡・池田西遺跡・高柳遺跡・門真市宮野遺跡・善賢寺遺跡・守口市大庭北遺跡・梶遺跡・大阪市森小路遺跡などである。楠遺跡では陶製紡錘車・陶製土錘が大量の初期須恵器・韓式系（軟質）土器とともに出土しており、渡来人の居住した集落ではないかと推測されている。また、門真市善賢寺遺跡・守口市大庭北遺跡・梶遺跡では古墳が検出されている。『日本書紀』・『古事記』には、この地に仁徳天皇の頃に「茨田堤」が築かれたことが記されている。茨田堤の場所については、いくつかの説があり確定されていないが、門真市の式内社の堤根神社北側には堤状の高まりが存在し、大阪府の史跡に指定されている。

律令期以降、この地域は茨田郡となるが、飛鳥～奈良時代の遺跡は多くない。寝屋川市池田西遺跡では、奈良時代の墨書土器が多数出土しており、公的施設が存在したと推定される。また、寝屋川市高柳遺跡では平安時代前期の大型建物跡・中国製白磁碗・石製帯飾り（巡方）・墨書土器等が出土しており、有力者の居宅跡と推定される。この高柳遺跡や近接する神田東後遺跡では、緑釉陶器・灰釉陶器が多量に出土しており、注目される。この付近には、奈良時代の古瓦および凝灰岩製蔵骨器（寝屋川市指定文化財）が出土した高柳廃寺跡があり、藤澤一夫氏が指摘するように茨田郡衙が存在した可能性が高い。この地域以外には門真市西三荘遺跡で土器が出土しているのみである。遺跡地から北側の枚方市中振にかけては南北方向の道路が認められ、条里が復元されている。調査地では、古墳時代以降の遺物はほとんど出土しておらず、水田等の耕作地として利用されていたと推定される。

参考文献

寝屋川市教育委員会『失われた古代の港』歴史シンポジウム資料　1997
寝屋川市教育委員会『茨田堤と茨田三宅』歴史シンポジウム資料　1999
濵田延充「北河内地域における弥生時代遺跡群の動態」『寝屋川市史紀要』第８号　2001

1．楠遺跡　2．池田下村遺跡　3．池田西遺跡　4．高柳廃寺跡
5．高柳遺跡　6．神田東後遺跡　7．高宮八丁遺跡　8．長保寺遺跡

第２図　周辺遺跡分布図（Ｓ＝１／25,000）

第Ⅳ章　発掘調査の成果

1．基本層序

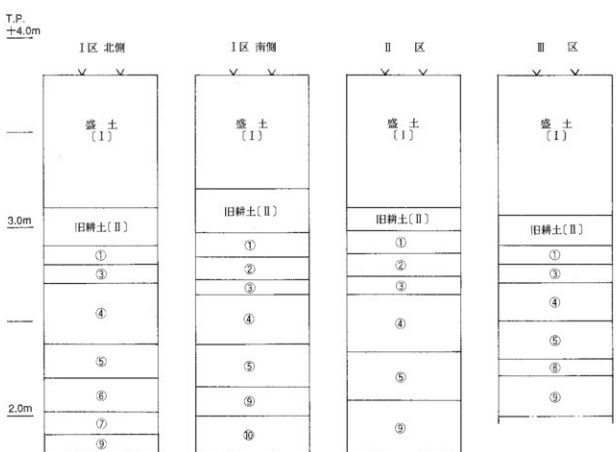
調査地の現地表面の標高は、T.P.＋3.8mである。調査地の現状は北側が社員寮、南側が駐車場となっており、現地表面は北側はコンクリート敷あるいは建物南側の庭となっていた地面で、南側は砕石が敷かれていた。以下、第3図に示したとおりの土層堆積が観察される。

第Ⅰ層　現地表下60～70cmは、水田面に盛土を行った土層である。堆積土層は、産業廃棄物等が含まれていない比較的精良な山土である。

第Ⅱ層　灰黒色粘質土層。盛土が行なわれるまで使用されていた、水田の耕作土である。層厚は、10～20cm。

第Ⅲ層　層厚20～40cmの黄緑灰色の砂混じり粘土層で、Ⅰ区南側からⅡ区にはこの層の下に灰色粘土層が認められる。Ⅲ層の下部には、洪水による堆積と考えられる淡緑灰色の細砂層〔Ⅲ′〕が、各調査区で認められる。

第Ⅳ層　層厚20～30cmと厚く堆積した灰色細砂混じり粘土層。今回の調査では、この土層までを機械によって除去している。機械掘削時およびⅠ区で機械の掘り残し部分を人力によって除去した際に、この土層より瓦器椀の破片が出土しており、11世紀（平安時代後期）以降の堆積土層であることがわかる。



第3図　堆積土層柱状模式図

第Ⅴ層　弥生時代および古墳時代中～後期の遺物包含層。暗灰色～暗灰褐色の粘土～粘質シルト層で、層厚は20～30cmである。Ⅰ区北側では地形が下がっていくのに対応し、層厚が50cm近くなっている。ただし、この部分の上部約20cmはほとんど遺物を含んでおらず、また奈良～平安時代の須恵器坏が出土していることから、古墳時代の遺物包含層でなかった可能性が高い。調査時に第Ⅴ層下部・第Ⅴ層最下部として古墳時代中～後期の土器が多量に出土した暗灰褐色粘土層および暗褐色粘質土層が、本来の第Ⅴ層であろうⅠ区南側およびⅢ区では、弥生土器が出土しているが、弥生時代と古墳時代中～後期の遺物包含層を分離できなかった。

第Ⅵ層　緑灰色シルト～細砂層。上面は、弥生時代および古墳時代中～後期の遺構面となっている。Ⅰ区北側・Ⅱ区南側・Ⅲ区東側では下部から激しい湧水が認められた。

2．検出された遺構

（1）Ⅰ区（第4図，図版2）

Ⅰ区は、今回の調査で設定した調査区の中で、最も大きな面積の調査区である。弥生～古墳時代の遺構面は南西隅が高く、北側に向けて徐々に低くなっている。遺構面のベースとなっている土層は南東隅では粘土層、その北側では細砂層、その北側は粘質シルト層となっている。調査区東壁およびサブトレンチの断面での観察の結果、細砂層は北側の粘質シルト層の下部に深く潜り込んでいることが判明した。以上のことから、細砂層以北は、本来自然河川であった部分が徐々に埋没していった姿と考えられる。弥生時代の遺構がこの細砂層の部分に分布していることから、この頃にはこの自然河川がほぼ埋められて、流心部が浅い窪地として湿地状に残っていたと推測される。古墳時代にはこの部分も埋没し、生活面として利用されている。

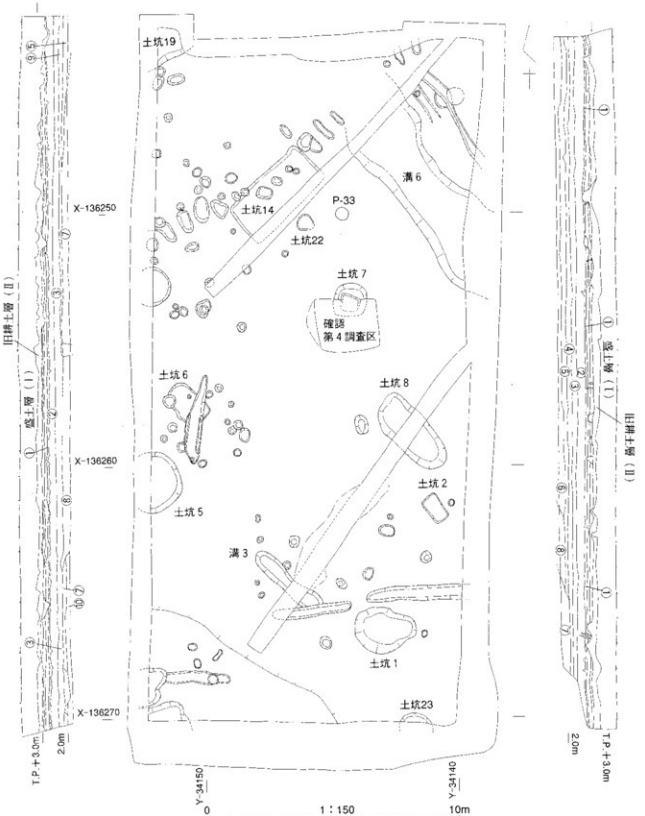
遺構は、調査区全体で柱穴・溝・土坑が検出されている。柱穴は、直径20～60cm、深さ10～30cmのもので、埋土中から出土している遺物（土器片）は小片のものが多いが、古墳時代のものに限られる。遺物が未出土のものも含めて、大部分の柱穴はこの時期に属すると判断される。調査区内で復元できた掘立柱建物は、北西部の2間×2間の総柱建物1棟にとどまる。

【弥生時代】

土坑1（第5図，図版3・4）

調査区南東隅で検出された平面形が不整円形となる大型の土坑である。長径2.4m、短径1.8m、深さ0.4mをはかる。東側に突出する部分があり、この部分が若干深くなっている。断面は緩やかなU字形を呈するが、東側の突出部分は壁がほぼ垂直になっている。埋土は、上部より暗灰褐色粘質土層（上層）、灰色シルト混じり粘質土層～粘質シルト層（中層）、緑灰色シルト層（下層）となっている。東側の突出部分の底面直上には、炭層が堆積している。また、西側中央部付近の下層上面にも薄く炭層が堆積している。

出土遺物は、中層以下で遺物収納箱（コンテナ）1杯分の弥生土器・土製鋳型外枠・高杯状土製品・砥石・石錐が出土している。土製鋳型外枠は2点出土している。（1）は遺構南西部の中層から、（2）は土層観察用セクション内の西側中層下部の炭層上面からそれぞれ出土している。また、高杯状土製品（5）は、東側突出部のセクション内で、上面が平坦な巨石の下に重なって出土している。このほか、埋土下層内より直径2～3cmのチャートの円礫が出土している（図版15）。



①淡緑灰色細砂層（Ⅲ′層）　②灰色細砂混じり粘土層（Ⅳ層）　③暗灰色粘土層（Ⅴ層）　④明灰色粘土層（Ⅴ層）
⑤暗褐色粘質土層（Ⅴ層）　⑥暗灰色粘質土層（上部にカルシウムを含む・Ⅴ層）　⑦緑灰色シルト層（Ⅵ層）
⑧灰色細砂層（Ⅵ層）　⑨暗灰褐色粘質土層（Ⅴ層）　⑩暗灰色粘土層（Ⅵ層）

第4図　1区遺構配置図および東西壁断面実測図（S＝1／150）

土坑５（第５図）

調査区南側西壁に接して検出された平面円形の土坑である。直径2.4m、深さ0.3mをはかる。西側約1/2は、調査区外のため未調査である。断面は緩やかなU字形であるが、北側の壁面は比較的急に立ち上がる。埋土は、上部が暗灰褐色粘質土層で、下部がシルト質の土層となっている。

規模・形態等は、上記の土坑１に良く似ている。ただし、埋土中からは若干の弥生土器が出土しただけで、青銅器鋳造に関連する遺物は含まれていなかった。出土土器は、後期初頭に比定される。

溝３（図版５）

調査区南側中央で細砂層の広がる方向と同じくして、北西－南東に延びる遺構である。長さ3.5m、最大幅0.8mをはかる。南端は、古墳時代の溝２と重複しており、中央部の一部は設定したサブトレンチで破壊している。断面はU字形で、深さ0.2mである。埋土は灰色シルト混じり粘土層である。北側で炭化物が多く含まれる部分がある。

遺物は、南側で多く出土している。出土土器には隣接する土坑１と接合関係をもつものがあり、同時期に機能していたと考えられる。この遺構からも土坑１同様に、チャートの円礫が数点出土している。

【古墳時代】

土坑２

調査区中央東側で検出された、平面長方形の浅い土坑である。長辺1.1m、短辺0.65m深さ10cmをはかる。壁面はほぼ垂直に立ち上がっており、底部は平坦である。埋土は暗灰色粘質土で、埋土中より少量の土器小片が出土している。同様な形状の遺構として、西側中央で検出された土坑６がある。

土坑７

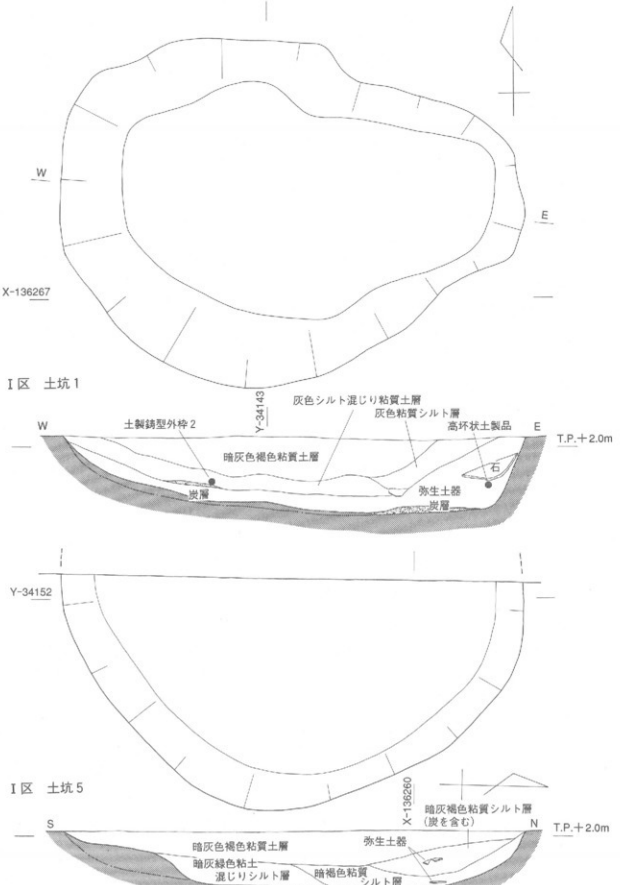
調査区中央付近で検出された、平面円形の遺構である。検出面は、最終遺構面（第Ⅵ層上面）よりやや高く、第Ⅴ層最下部上面に相当する。南側半分が確認調査の第４調査区にかかっており、この時に機械によって一気に掘削したために、十分な調査を行えないまま破壊している。検出面では直径1.3mの平面円形であるが、２段掘りとなっており、下部は一辺0.7mの方形の掘形となっている。深さ0.5mをはかる。底部は湧水層に達しており、遺構の形状からも井戸であった可能性が高い。

土坑８

調査区中央東側で検出された、平面長円形の土坑である。長径3.4m、短径1.4m、深さ30cmをはかる。断面はU字形を呈する。埋土は暗灰色粘質土で埋土中より若干の土器が出土している。出土土器より古墳時代中期後半と考えられる。

土坑14

調査区北側中央で検出された、平面長方形の土坑である。東南側は、サブトレンチ掘削時に破壊されている。長辺3.7m、短辺1.4m以上、深さ15cmをはかる。壁面はほぼ垂直に立ち上がっており、底部はほぼ平坦である。底面で数基の柱穴を検出しているが、この遺構に伴うものか判断できない。埋土は暗褐色粘質土で、埋土中より土器が出土している。出土土器は小片のものが多いが、古墳時代中期中頃から後半に比定される。



第5図　I区 土坑1(上)および土坑5(下) 平面・断面実測図（S＝1／20）

土坑19

調査区北西隅で、検出された遺構である。遺構の一部を調査しただけで、大部分は調査区外に存在する。遺構名を土坑としたが、本来は溝であったかも知れない。深さ40cmをはかる。埋土は暗褐色粘質土で、埋土中より若干の土器が出土している。出土土器は比較的大きな破片が多い。初期須恵器を含んでおり、後述するⅠ区溝６と並んで、楠遺跡における古墳時代集落出現期を示す資料である。

土坑22

調査区北側中央で、サブトレンチ南側に設定した土層観察用のセクション部分で検出した。この遺構も上記の土坑７同様に第Ⅴ層最下部上面で検出している。直径30cm、深さ５cmの浅い皿状の凹みに、灰色粘質土が堆積し、その上に高さ５cmで多量の焼土をブロック状に含む土が、レンズ状に盛り上がるように堆積していた。かまどのような用途をもった遺構と思われる。

P－33（図版５）

調査区中央北側の溝６南肩部付近で検出された、土器埋納遺構である。溝６南側の堤状の高まりの中に明確な掘方をもたず、ほぼ完形の土師器壺１個体が検出されている。小児用の土器棺の可能性があり、土器内に堆積した土を洗浄したが、骨等は検出できなかった。

溝６

調査区北側中央から南東方向に流れる浅い溝である。幅２m、深さ0.2m、検出長約５mをはかる。埋土は、黒灰色粘質シルトである。北側サブトレンチの土層観察用のセクションを残した部分では南北両肩部に20cm程度の堤状の高まりが観察された。調査区北中央付近では、第Ⅱ章で述べたとおり、当初激しい湧水で遺構面が泥土となったために検出ができず、包含層と一緒に埋土中の遺物の取り上げを行っている。埋土中より、土師器・須恵器等の土器が出土している。出土土器には、初期須恵器・韓式系（軟質）土器が含まれており、今回調査の古墳時代土器では最も古い様相をもつものである。

溝６は、埋没河川と同じ方向に流れており、また調査区内の最低地を流れていることから、自然河川埋没後に残った窪地状の地形を利用した遺構で、集落内の排水路として機能していたと推察される。

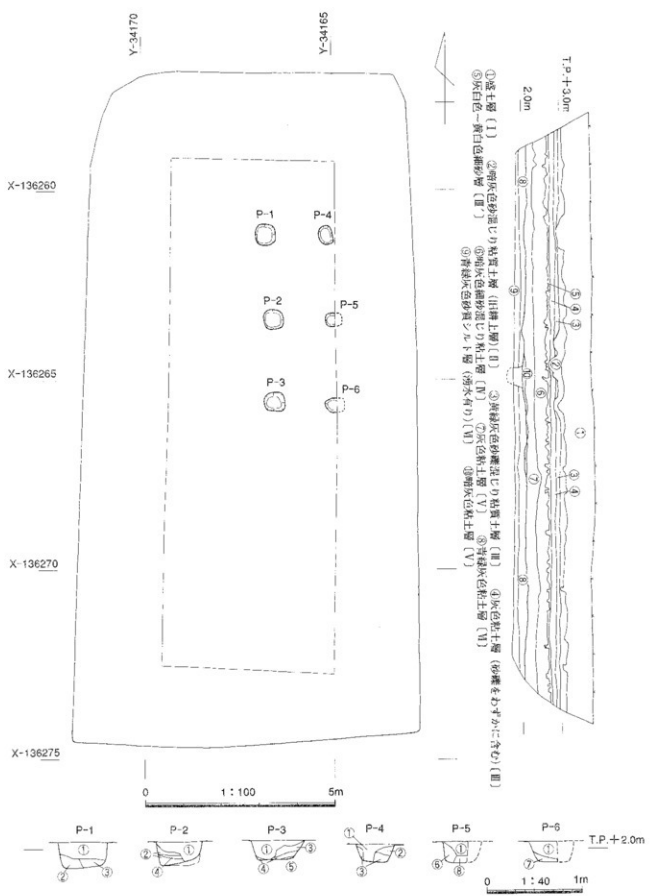
（２）Ⅱ区（第６図，図版６・７）

Ⅰ区西側に設定した調査区である。遺物包含層の第Ⅴ層は、約20cmの厚さで堆積しているが、出土遺物はコンテナ２箱程度と少ない。検出した遺構も希薄で、柱穴６箇所だけであった。

掘立柱建物

調査区北東部で検出された。６箇所の柱穴から復元される。東側は調査区外にのびており、東側に１列分（３箇所）の柱穴を想定すると、２間×２間の総柱建物に復元される。建物軸は正方位からわずかに西に振れている。柱間は、梁間約1.5m、桁行約2.0mとなる。柱穴の掘形は一辺40～50cmの隅円方形の平面形で、深さ20～30cm掘られている。掘形内に柱根は遺存していなかった。

埋土中からは、土器小片が少量出土しているのみで、時期比定は困難である。おおむね古墳時代中期と考えられる。なお、西南隅の柱穴Ｐ－３よりほぼ完形の滑石製剣形石製品（第８図４）が出土している。出土層位が不明のため判断できないが、建物の建築あるいは廃棄にともなう祭祀行為に関係する遺物と考えられる。



第６図　Ⅱ区 遺構配置図・東壁断面実測図（Ｓ＝１／100）および柱穴東西断面実測図（Ｓ＝１／40）

（3）Ⅲ区（第7図、図版8）

調査地の北西隅に貯留槽の設置に伴って設定された、狭小な調査区である。遺構面となる第Ⅵ層上面は標高2.2mで、他の調査区より若干高くなっている。しかし、この調査区も遺構面となる緑灰色シルト～細砂層上面まで掘り下げると湧水があって遺構面が軟化し、井戸を設置して強制的に排水を行うようになる調査の終盤まで遺構の検出は十分にできなかった。

検出された遺構は、30箇所を越える柱穴と溝で、遺構の密度は高い。柱穴は、直径20～80cm、深さ10～40cmとばらつきがある。調査区が狭小なため、調査区内で建物を復元することができなかった。4～5棟の建物が重複していると考えられる。いずれの柱穴も、埋土中から出土した遺物は少ないが、おおむね古墳時代の土器に限られており、大部分の柱穴は古墳時代中期～後期に属すると考えられる。なお、第Ⅴ層出土遺物を含めて、本調査区では初期須恵器・韓式系（軟質）上器の出土は少なく、中期後半～後期前葉に比定されるものが主体を占める。

溝1および溝2は、埋土中の出土遺物が弥生土器に限られており、この時期の遺構と判断される溝1は幅0.8m、深さ0.2mをはかり、断面は逆台形である。埋土は、暗灰色の粘質シルトである。溝2は幅1m深さ20cmをはかり、断面はU字形である。埋土は、溝1同様に暗灰色の粘質シルトである。2条の溝は、調査区中央で重なるが、両者の関係については現場で確認できなかった。

3．出土遺物

（1）弥生時代

[弥生土器]

1区土坑1出土土器（図版21－1～6）

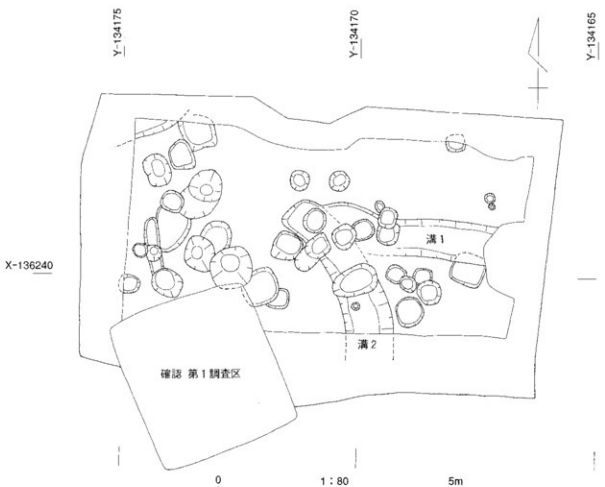
（1）は、小型の器台。口縁端面には櫛描波状文を施した後、2個1対の円形浮文を8～9方向に貼り付ける。口縁内面には外側より櫛描波状文・直線文・波状文が施され、端部には赤色顔料が塗布される。櫛描波状文は鋸歯状となり、回転台を駆使した中期の同文様とは異なっている。体部には、上下2段に4方向の円形の透孔が穿たれる。下部の透孔間には、円形の赤彩文が塗布されている。外面は、透孔間の上部に3＋α条（4条か？）、下部に4条、さらに裾部に5条のヘラ描沈線文が施される。体部外面は、縦方向のヘラミガキ調整が施される。内面は、横方向のナデ調整。

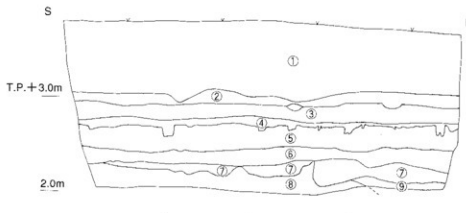
（2）は、鉢。屈曲して内傾気味に立ち上がる口縁部外面には、4条の凹線文が施される。口縁上端部は、横ナデ調整による面をもつ。体部外面はタタキ目成形の後、上位にはハケ目、下位にはヘラケズリ調整が施される。内面はハケ目調整の後、放射状にヘラケズリのような強いナデ調整が施される。類例は近畿地方では知られておらず、香川県仲善寺遺跡SH9202・同県上天神遺跡4区SD16f溝出土資料[1]に類例が認められる。

（3）・（4）は、屈曲して立ち上がる浅い杯部をもつ中期の生駒西麓型[2]の高杯の系譜をひくもの。（3）は、屈曲部外面の稜線が明瞭でなく、中期的である。一方、（4）は直線的となり、後期的である。（4）には、外面に（1）の高杯同様に円形の赤彩文が施される。ともに、口縁上端部に赤彩が施される。

（5）は、屈曲部が下方に突出する異形の口縁部である。有段の高杯、あるいは中部瀬戸内系の器台・長頸壺の口縁部になると思われる。この土器も、口縁上端部に赤彩が施されている。口縁外面には、櫛状工具による刺突文が施される。

（6）は、「く」の字の口縁部をもつ甕。口縁部は横ナデにより面をもつが、中期後半に通有のつまみ上げるような形状となっていない。





①盛土層〔Ⅰ〕　②灰黒色粘質土層（旧耕土層）〔Ⅱ〕　③黄緑灰色砂礫混じり粘質土層〔Ⅲ〕
④淡黄灰色砂質シルト層（下部は細砂層）〔Ⅲ'〕　⑤灰色粘土層〔Ⅳ〕　⑥暗灰色粘土層〔Ⅴ〕
⑦暗灰色粘質土層（緑灰色シルトをブロックに含む）〔Ⅴ〕　⑧緑灰色シルト～細砂層〔Ⅵ〕
⑨暗灰色粘質土層（土坑1埋土）

第7図　Ⅲ区 遺構配置図（S＝1／80）および西壁断面実測図（S＝1／40）

Ⅰ区土坑5出土土器（図版21－8～10）

（8）・（9）は、長頸壺。頸部～口縁部は、直線的にのびる。外面は、縦方向のヘラミガキ調整が施される。（8）は、口縁部に鋸歯状の櫛描波状文が施される。（8）は胎土中に雲母・角閃石を含み、黒褐色を呈する生駒西麓産土器。

（10）は、有段口縁をもつ高杯。屈曲部には2条の凹線文が施される。器表面が摩滅のため、調整は不明である。

Ⅰ区溝3出土土器（図版21－11～13）

（11）は、屈曲して立ち上がる杯部をもつ高杯。屈曲部は、外方向に突出する。外傾気味に立ち上がる口縁部外面には3条の凹線文が施され、口縁上端部は強い横ナデ調整による面をもつ。杯部外面は、横方向のヘラケズリ・ヘラミガキ後に放射状のヘラミガキ調整を施す。近畿地方中央部の中期弥生土器の系譜には無く、類例は中部瀬戸内地域の中期末～後期初頭に認められる[3]。

（12）は、甕。口縁部は面をもち、浅い凹線文が2条施される。体部外面は、水平方向のタタキ目の上から縦方向のハケ目調整が施される。内面は上部が板状工具によるナデ調整、下部はわずかにヘラケズリが観察される。

（13）は、甕あるいは短頸壺の体部となると思われる。内面は、下位を中心にヘラケズリが施される。外面は、器表面摩滅のため調整は不明である。

Ⅰ区遺物包含層（第Ⅴ層）出土土器（図版22－14～23）

（14）は、垂下口縁をもつ広口壺。口縁端面には竹管文が施される。頸部内外面には、縦方向のヘラミガキ調整が施される。形態的に中期の生駒西麓型広口壺の系譜をひくものであるが、胎土中には角閃石が含まれず生駒西麓産土器に共通する胎土でない。溝6（古墳時代中期遺構）出土。

（15）は、Ⅰ区溝3出土（10）と同形態の中部瀬戸内系と考えられる高杯。屈曲して外傾気味に立ち上がる口縁部には4条の凹線文が施される。杯部外面の調整は放射状のヘラミガキ調整の後、横方向のヘラケズリ・ヘラミガキ調整。南側第Ⅴ層出土。

（16）は、笠形の蓋。外面は放射状にハケ目調整が施される。南側第Ⅴ層出土。

（17）は、甕。口縁端部を横ナデによってつまみ上げ、広い面をもつ。体部外面は、水平ないしは右上がりのタタキ目の上から縦方向のハケ目調整を施す。内面は板状工具による強いナデ調整。口縁部の凹線文の有無を除くとⅠ区溝3出土の甕（11）に類似する。南側第Ⅴ層出土。

（18）は、「く」の字口縁をもつ甕。口縁端部は、横ナデによってわずかに面をもつ。体部外面は、板状工具による縦方向のヘラケズリ状のナデ調整を施す。北側第Ⅴ層出土。

（19）は、台付細頸壺。頸部～口縁部を欠失する。体部は算盤玉形で、屈曲部は明瞭な稜線が認められる。器表面摩滅のため調整等は不明である。Ⅰ区北側に設定したサブトレンチの第Ⅴ層下部出土。

（20）・（21）は、壺の体部である。（20）は、体部外面を下位は縦方向にヘラミガキ調整を施した後に、中位に横方向のヘラミガキ調整を施す。上位は器表面が摩滅し観察が困難であるが、櫛描文様は施されておらず、縦方向のヘラミガキ調整が加えられている。内面は、成形時の粘土帯の接合痕が明瞭に残っている。（22）は、縦方向のヘラケズリの後、横方向のヘラミガキ調整を施す。底部付近に、錐状の工具の回転による焼成後の穿孔を施す。いずれも、南側第Ⅴ層出土。

（23）は、甕の体部。内外面とも器表面が剥離しており、調整等不明である。南側第Ⅴ層出土。

Ⅲ区出土土器（図版22－24～30）

(23)は、無文の短頸壺。口縁部は歪に波打っており、体部下位～中位の接合部での段が観察される。体部上位に記号文を施す。体部外面は、縦方向のヘラミガキ調整を施す。溝１出土。

(24)は、「く」の字形口縁をもつ盤。全体に厚手の作りで、内面には成形時の粘土帯の接合痕が観察される。体部外面は、水平～左上がりのタタキ目が認められる。溝１出土。

(25)は、甕。口縁端部は、面をもつ。体部外面は、縦方向のハケ目調整。第Ⅴ層最下部出土。

(26)は、浅い凹状の杯部に屈曲して立ち上がる口縁部をもつ高杯。屈曲部には、明瞭な稜線が認められる。杯部は内外面ともに放射状のヘラミガキ調整が施される。口縁部は内外面に暗文状に縦方向のヘラミガキが断続的に施される。溝１出土。

(27)は、浅い椀形の杯部をもつ高杯。外面は横方向の後に放射状のヘラミガキ調整を施す。内面は、器表面風化のため調整等が不明である。第Ⅴ層最下部出土。

(28)は、小型の高杯あるいは台付鉢。杯部と脚部に接点は無く、図上で復元を行った。「ハ」の字形の脚部は、小円孔が巡る。破片は、土坑14・Ｐ６・Ｐ14から出土している。

(29)も、同様な小型の高杯の脚部。外面には、３条の暗文状の浅い沈線の下に、櫛描波状文が施される。波状文は鋸歯状である。第Ⅴ層最下部出土。

(30)は、高杯の柱状脚の裾部。裾端部は、上方に立ち上がり面をもつ。４方向に２孔１対と思われる小円孔が穿たれる。胎土中には角閃石・雲母が多く含まれ、黒褐色を呈する生駒西麓産土器である。溝１出土。

赤色顔料の付着した土器（巻頭図版２）

今回の調査で出土した弥生土器には、上記の高杯・器台のほか壺の口縁部に赤色顔料の塗布されたもの(101)がある。

(102)は、内面のほかに断面にも赤色顔料が付着している甕の破片である。甕を縦に半裁して、赤色顔料の容器として利用したと考えられる。外面はススが付着しているが、甕として使用した際に付着したのか、その後の赤色顔料の容器として使用された際に付着したのかは判断できない。Ⅰ区溝３出土。

同様な用途をもつ土器として、広片口皿と呼ばれるものがある。近畿地方では、大阪府東大阪市巨摩廃寺遺跡、高槻市古曽部・芝谷遺跡、奈良県田原本町唐古・鍵遺跡での出土例が知られている[1]。これは、甕形土器を製作途中で半裁し、把手状の部分を付けたものであるが、その用途として朱の精製が想定されている[2]。本例の赤色顔料は成分分析を行っていないため特定できないが、朱となる可能性が高いと思われる。上記のとおり、赤色顔料の塗布された土器が多く出土しており、こうした行為に関連する資料と理解できよう。

【土製品】

高杯状土製品（図版11・12・26－５）

直径17.5cmの椀形の杯部に、柱状の脚部が付く土器の高杯のような形態をしている。杯部内面は「土製錘型外枠」同様にヘラケズリで荒く仕上げられたままで、貫通する直径約5mmの穴があけられている。全体に厚手のつくりで、口縁部は一箇所が片口に仕上げられている。片口部分の両側には剥離痕があり、片口上部に把手のようなものが付いていたと推測される。また杯部外面にはタタキ目が観察され、６箇所に小突起が付けられている。内面には、高熱によると思われる明瞭な変色が認められる。一方、外面には変色が認められない。

同様な土製品は、奈良県田原本町唐古・鍵遺跡で土製鋳型外枠等の青銅器鋳造関連遺物と伴って出土している[6]。唐古・鍵遺跡出土例には、内面に鉱滓あるいは真土のような付着物があり、溶けた青銅を鋳型に流し込む「取瓶（とりべ）」として使用されたと推定されている。唐古・鍵遺跡出土品では、杯部に穴をあけて注口を作っており、本例とは若干異なる。杯部内面には、土製鋳型（外枠）同様に粘土を貼って使用したと考えられている。

土製鋳型外枠（図版13・14・26－１～４）

（１）・（２）は、いずれも土坑１から出土した全体の形状がわかる遺物である。いずれも長さ9.0cm、幅4.5cm、厚さ1.5cmのかまぼこ型をした土製品で、凸面部分は、ていねいなヘラミガキが施されている。一方、平坦な面はヘラケズリを施し、表面を荒く仕上げられている。この面に直径５mm、深さ４mm程度の孔が2列に（１）には８箇所、（２）には10箇所あけられている。また片側の長辺部分が約２mm高くなっている。上部と考えられる片側の短辺部分には３本の線刻（ヘラ状の工具による刻み目）が施されている。２個の土製品は、大きさや形態から１対で使用されたと思われる。

（３）は、土坑23から出土した小片で、全体の形状が不明である。上記の遺物同様に荒く仕上げられた面をもっている。厚さは２cmで、全形は（１）・（２）より大型になると推測される。

（４）は、上記遺物の出土した周辺のⅠ区南側の遺物包含層から出土した。（３）同様に小破片のため、全体の形状は不明である。やはり、１面だけが荒く仕上げられている。

（１）・（２）は、孔のあけられていた平坦面を利用して、使用されたと考えられる。同様に断面かまぼこ形の土製品としては、奈良県田原本町唐古・鍵遺跡出土の青銅器の土製鋳型外枠が知られている[7]。本例も、この面に真土を塗って青銅製品の形を彫り込み、鋳型として使用されたと考えられる。孔は、この真土を鋳型外枠からはがれないようにするためのものと考えられる。唐古・鍵遺跡出土品には、この部分にキザミ目が施されたものがあり、同様な目的をもったものであろう。

このほか、青銅器の鋳造に関係すると思われる遺物としてスサ入り粘土塊（図版14－５・６）をあげておく。（５）は、Ⅰ区南側第Ⅴ層出土。（６）は、Ⅰ区土坑８（古墳時代遺構）出土。

算盤玉形土製品（図版10・21－11）

弥生土器無頸壺のミニチュアの様な形態の土製品である。直径4.5cm、高さ2.4cmをはかる。ただし、土器のように中空ではなく中実で、上部から直径1.7cm、深さ1.2cmの凹みが穿たれる。凹みの周縁部に、２孔１対の紐孔となる小孔が穿たれている。外面は器表面風化のため部分的にしか観察できないが、ハケ目調整後に全面に赤色顔料が塗布されている。

同様な土製品は、茨木市東奈良遺跡等で出土が知られ、儀杖等の先端部と推定されている[8]。本例も、中空でないことや全面に赤彩されていることから、無頸壺のミニチュア土器と考えるより、同様な特殊な土製品と理解すべきと思われる。

【石器】

石錐（第８図９，図版10）

Ⅰ区土坑１出土。サヌカイト製。重さは、3.91g。頭部の一部を欠損する。扁平なつまみ状の多角形の頭部から短い錐部を作りだす。錐部は、細かい押圧剥離によって仕上げられている。

（2）古墳時代

【土器】（図版23～25）

Ⅰ区溝6出土土器（図版23）

（31）～（47）は、須恵器。

（31）～（33）は、坏蓋。丸味をおびた稜部は上方に突出する。（34）は、壺類の蓋。天井部には櫛描波状文が巡る。横方向に2孔の紐孔が穿たれた笠形の把手が付けられている。

（35）は、算盤玉形の坏。蓋受け部は、突出しない。体部外面は平行タタキ目の後、回転ナデが施される。同様な算盤玉形の坏は、堺市の陶邑古窯跡群では栂（TG）232号窯・大野池（ON）231号窯での出土が知られている[9]。硬質に焼かれ、断面は赤紫色を呈する。

（36）は、コップ形の把手付碗。把手部分は欠失しているが、上部に双方向の蕨手文が付けられていたと復元できる。（37）は、樽形瓶の体部。

（38）・（39）は、上師器高杯を模倣したような形態をもつ無蓋高杯。後述する土坑19や第1次調査でも出土しており、本遺跡の須恵器を特徴づける形式の土器である。（40）は、把手付無蓋高杯。脚裾部は図上で復元している。脚部は8方向に長方形の透孔を設けている。

（41）は、筒形器台の口縁部。第1次調査では土坑2から完形品が出土している。（42）は、甑あるいは鍋の口縁～体部上位である。外面には、平行タタキ目が施される。

（43）は、壺。頸部には、3帯の櫛描波状文の間にシャープな突線が巡る。

（44）～（47）は、甕。（44）・（45）は、口縁端部に面をもち、下端が突出する。（46）・（47）は、口縁下端に突線が巡る。（46）は、焼け歪みのためか、口縁部が波打ってゆがんでいる。

（48）～（55）は、土師器。

（48）は、蓋坏。胎土中には砂粒を多く含み、須恵器のものと異なることから、須恵器の焼成不十分なもの（生焼け品）ではなく、土師器として作られたと判断される。

（49）は、小型の直口壺。胎土は精良で、横方向のていねいなナデ調整がほどこされる。

（50）・（51）は、高杯の杯部と脚部。杯部は、屈曲部が不明瞭となる布留式後半の特徴をもつ。

（52）～（55）は、甕。（52）は、「く」の字形口縁部をもつもの。内面はヘラケズリを施す。（53）・（54）は、口縁端部内面を肥厚させ、内傾する面をもつ布留形甕。口縁部は直立気味となり新しい様相をもつ。（55）は、「く」の字形口縁部をもつ長胴の甕。外面は荒いハケ目調整が施され、内面はナデ調整が施されるが、内面には粘土帯の接合痕が部分的に認められる。胎土中に角閃石を多く含み、茶褐色を呈する生駒西麓産の胎土である。

Ⅰ区土坑19出土土器（図版24－56～62）

（56）・（57）は、須恵器鉢。（56）は口縁端部、（57）は口縁端部・体部下半を欠失する。頸部が締まり、肩部に張りをもつ古式の形態である。体部上位は無文で、ていねいな回転ナデ調整を施す。

（58）～（60）は須恵器無蓋高杯。本遺跡での特徴的な須恵器である。脚裾端部は回転ナデ調整による面をもつもので、陶邑古窯跡群出土の同様な高杯のように突線を巡らすものと異なっている。

（61）は、土師器高杯の脚部。（62）は、土師器鉢あるいは甕である。「く」の字形に屈曲した口縁部内面には、横方向の荒いハケ目調整が施される。

Ⅰ区その他の遺構出土土器（図版24－63～65）

（63）は、P－33出土の完形の土師器壺。口縁端部の一部が欠損するが、遺構埋納時に意図的に打ち欠

きを行った行為によるものかは、判断できない。外面はハケ目調整を施す。肩部には直径1cmの竹管文が7方向に施される。内面は、ヘラケズリが観察される。

(64)は、土坑14出土の須恵器甕。体部外面は、平行タタキ目の後に回転ハケ目（カキメ）調整が施される。体部内面には成形時の当て具痕（青海波文）が観察される。田辺編年TK208型式（中村編年1型式3段階）に属するものであろう[28]。

(65)は、土坑8出土の須恵器甕。口縁端部は丸みをもった面をもつ。体部外面は、平行タタキ目の後に口縁部まで回転ハケ目（カキメ）調整が施される。田辺編年TK23～47型式（中村編年1型式4～5段階）に属する。

Ⅰ区第Ⅴ層最下部出土土器（図版24・25－66～77、第9図）

(66)は、須恵器蓋坏。口縁端部は丸く仕上げられる。

(67)は、須恵器鉢。口縁部に1帯、頸部に3帯の櫛描波状文を施す。体部外面は肩部～中位に櫛描列点文・ヘラ描沈線2条・櫛描波状文・ヘラ描沈線1条が施される。

(68)～(70)は、大型の高杯形器台の各部分の破片である。(68)・(69)は、かなり離れた地点で出土しているが、断面内部が赤灰色を呈するよく似た焼き上がりとなっており、同一個体となるかもしれない。杯部・脚部には、櫛描波状文が施される。

(71)は、須恵器無蓋高杯。杯部は須恵器坏蓋を逆転させ、脚部は(67)のはそうの口縁部を逆転させたものである。(72)は、(58)・(60)と共通する須恵器無蓋高杯の脚部。(73)は、形態的にこれらの脚部とかなり異なる。上層からの混入品の可能性がある。

(74)は、土師器甕。「く」の字形に屈曲する口縁部は、小さな面をもっておわる。体部外面は縦方向のハケ目調整。(75)は、土師器高杯の脚部。内面は横方向にヘラケズリが施される。

(76)は、大型の土師器高杯。杯部～口縁部の屈曲部には突線が巡る。杯部は回転ナデ調整が施される。杯部と脚部の接合部分は、杯部に放射状のキザミ目が施されている。胎土は砂粒をほとんど含まない精良なものである。製作技法には、伝統的な土師器高杯の製作手法は認められず、韓式系（軟質）土器として理解すべきと思われる。橙白色の精良な胎土である。

(77)は、須恵器大型甕の口縁部。口縁端部はシャープに作られており、やや下がったところに突線が巡る。外面は、横方向にナデ調整が施される。

(94)は、韓式系（軟質）土器の甕。体部には鳥足文タタキ目を施した後に、暗文状の浅い沈線を巡らせる。底部はタタキ目が体部と異なり、底部貼付技法で製作されている。胎土は砂粒をあまり含まない精良なもので、色調は淡灰色～橙白色を呈する。

Ⅰ区第Ⅴ層（下部）出土土器（図版25－78～86）

(78)は、須恵器把手付無蓋高杯。脚部の透孔は、4方向に施される。

(79)は、須恵器蓋坏。焼成は不良で、灰～橙灰色を呈する。

(80)～(82)は、須恵器坏蓋。(80)は田辺編年ON15型式（中村編年2型式1段階）、(81)は同TK10型式（同2型式2段階）、(82)は同TK43型式（同2型式3段階）にそれぞれ属するであろう。(83)は、須恵器有蓋高杯の蓋。田辺編年TK47型式（中村編年1型式5段階）で理解できよう。

(84)は須恵器高杯の脚部。杯部内底面と脚部に「×」のヘラ記号が刻まれている。

(85)は、土師器長胴甕の口縁部となると考えられる「く」の字形の口縁部。口縁内面は、横方向の荒いハケ目調整を施す。Ⅰ区南側第Ⅴ層出土で、北側の第Ⅴ層最下部出土土器に対応するかもしれない。

(86)は、上師器小型甕の口縁～体部上半部。

Ⅱ区出土土器（図版26－87～89）

(87)は、須恵器の壺の体部。外面は、ていねいなナデ調整が施される。底部内面には指頭圧痕が残っている。(88)は、(70)と同じ須恵器の器台の脚裾部。(89)は、韓式系（軟質）土器甑の底部。中央1＋周辺6の円形の蒸気口をもつ。外面は平行タタキ目が認められる。色調は橙白色を示す。

(87)～(89)は、いずれも遺物包含層（第Ⅴ層）出土。

Ⅲ区出土土器（図版26－90～93）

(90)は、須恵器の坏蓋。稜線は短く突出する。田辺編年TK47型式（中村編年1型式5段階）に属する。(91)は、須恵器の蓋坏。口縁端部は、内側に段を有する。田辺編年MT15型式（中村編年2型式1段階）に属する。(92)は、小型の土師器の碗。(93)は、上師器甕。体部外面はハケ目、内面は板状工具によるナデ調整である。

以上の土器は、すべて遺物包含層（第Ⅴ層）出土。

製塩土器（図版17b）

Ⅰ区北側の第Ⅴ層を中心に、製塩土器の破片が出土している。製塩土器はコップ形の丸底1式に属するものである[11]。外面の調整は、ナデ調整が主体を占める。

【石製品】（第8図1～8，図版20a）

臼玉（第8図1・2）

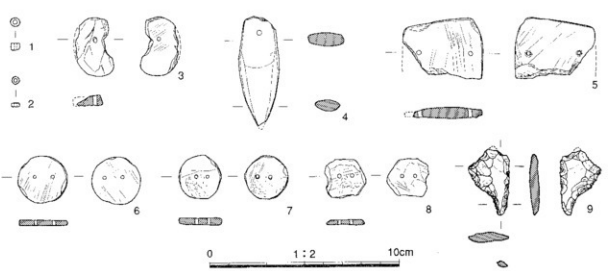
3点出土している。いずれも黒緑色を呈する滑石製。(1)はⅠ区土坑6内ピット出土で、直径4.5mm、厚さ4.0mm、重さ0.12gで、孔の直径はを2mmである。(2)はⅠ区土坑14出土で、直径4.5mm、厚さ3.2mm、重さ0.05ｇで、孔の直径は2mmである。両者とも研磨によって、側面中位に膨らみをもっている。このほか、Ⅰ区北側第Ⅴ層最下部（溝6埋土か？）から破片が1点出土している。

勾玉（第8図3）

(3)は滑石製で、板状の扁平な体部をもつ。全長3.1cm、幅1.5cm、厚さ0.55cm、重さ4.53gをはかる。片面は、破損が著しい。遺存状態のよい部分には、研磨痕が観察される。直径2mmの紐孔は、残りのよい面からの片面穿孔である。紐孔の位置は、通常のものよりやや下がった場所にあり、有孔円盤を再利用した可能性がある。Ⅰ区北側第Ⅴ層下部～最下部（溝6埋土？）出土。

剣形石製品（第8図4）

(4)は、Ⅱ区建物の柱穴P－3出土の緑灰色を呈する滑石製の剣形石製品である。先端部と頂部の一部を欠損する。現存長5.8cm、最大幅2.1cm、厚さ0.9cm、重さ13.73gをはかる。平面形は、体部中位にやや膨らみをもっており、この部分から頂部にかけて両側縁は研磨にによって面を作っており、断面長方形となる。一方、この部分から先端は、両側縁を尖らせて刃部を作りだすように研磨が加えられており、断面はレンズ状となる。全体の仕上げもていねいである。片面より直径2mmの紐孔が、穿孔されている。



第８図　弥生時代および古墳時代石製品実測図（Ｓ＝１／２）

有孔円盤（第８図５～８）

Ⅰ区北側の遺物包含層より、４点が出土している。

（５）は、大型品で、一部欠損する。幅5.1cm、厚さ0.6cm、重さ12.1gをはかる。両面に荒い研磨痕が観察される。直径２mmの紐穴は、主として片面より穿孔されている。２孔間の距離は、2.5cm。石材は滑石と思われるが、淡緑色を呈し、結晶片岩状である。

（６）～（８）は、いずれも滑石製の小型品である。（６）はていねいに仕上げられており、直径2.6cm、厚さ0.3cm、重さ3.74gをはかる。孔間0.75cmで、片面より直径1.5mmの紐孔が穿孔されている。黄緑色を呈する。（７）もていねいな仕上げをおこなっている。暗青灰色を呈し、片面は、一部欠損している。直径2.3cm、厚さ3.5cm、重さ3.64gをはかる。孔間距離0.45cmで、片面より直径2mmの紐孔が穿孔されている。（８）は、遺存状態が悪い。周縁部の残っている部分を観察すると、本来もかなりいびつな平面形をしていたと考えられる。孔間距離0.5cmで、片面より直径1.5mmの紐孔が穿孔されている。暗緑色を呈する。

このほか、今回の調査では数点の砥石、滑石の石材と思われるもの３点（図版20a－10）、用途不明の結晶片岩製の棒状製品（図版20a－12）が出土している。砥石（図版20a－11）は、Ⅲ区出土。仕上砥に相当する目の細かい白色の小型品である。

（３）動植物遺存体（図版20b）

動物骨・歯

Ⅰ区北側の溝６や遺物包含層（第Ⅴ層最下部）を中心に、動物骨・歯が出土している。動物骨は、小片で種の確定は困難であるが、ウマあるいはウシと考えられる。歯は、いずれもウマである。

前回の調査でも馬歯が出土しており、遺跡（集落）内でウマの飼育が行なわれていたと思われる。

貝殻

遺物包含層から、２点のシジミの貝殻が出土している。１点は、Ⅰ区南東の第Ⅴ層最下部出土で、弥生土器と共伴している。もう１点は、Ⅰ区北側中央の溝６埋土と推定される第Ⅴ層最下部の出土である。未

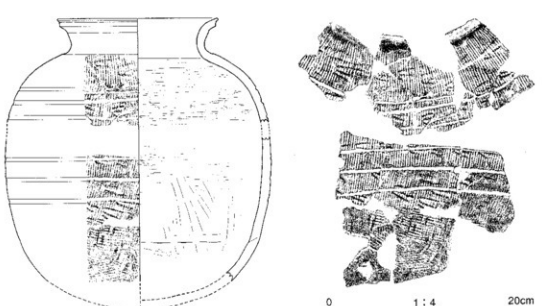
鑑定のため、種の同定に至っていない。

桃核

動物遺存体同様に、Ⅰ区北側の遺物包含層（第Ⅴ層最下部）を中心に、桃核が10点出土している。長さは最大2.4cm、最小1.8cmで、平均2.1cmとなる。

註

1．香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査報告』平成５年度香川県土木部道路整備事業に伴う発掘調査報告集 1994
（財）香川県埋蔵文化財調査センター『上天神遺跡』1995
2．三好孝一「生駒西麓型土器の一視点」『花園史学』第8号　1987
濱田延充「弥生時代中期におけるいわゆる生駒西麓産土器の製作地」『京都府埋蔵文化財情報』第35号　1990
3．止岡睦夫「備前地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編　木耳社　1992
4．（財）大阪文化財センター『巨摩・瓜生堂』1982
高槻市教育委員会『古曽部・芝谷遺跡』高槻市文化財調査報告書第20冊　1996
田原本町教育委員会『唐古・鍵遺跡第61次発掘調査概報』田原本町埋蔵文化財調査概要16　1997
5．大久保徹也「上天神遺跡出土赤色顔料付着資料について」『上天神遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査研究センター 1995
6．田原本町教育委員会『唐古・鍵遺跡第61次発掘調査概報』田原本町埋蔵文化財調査概要16　1997
7．田原本町教育委員会『唐古・鍵遺跡第61次発掘調査概報』田原本町埋蔵文化財調査概要16　1997
8．三木　弘「所謂杷頭とした土製品について」『東奈良遺跡』（財）大阪府文化財調査研究センター　1998
9．（財）大阪府埋蔵文化財協会『陶邑・大庭寺』Ⅳ　1995
（財）大阪府埋蔵文化財協会『野々井西遺跡・ON231号窯跡』1994
10．須恵器の編年は、以下の研究に従う
田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古クラブ　1966
中村　浩「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑Ⅲ』大阪府教育委員会　1978
11．広瀬和雄「近畿地方における土器製塩」『考古学ジャーナル』298号　1988



第９図　鳥足文タタキ目をもつ土器実測図

第Ⅴ章　まとめ

今回の発掘調査では、弥生時代と古墳時代の２時期の集落を検出することができた。古墳時代の集落は従前の調査で検出されている集落の広がりを確認することができた。また、弥生時代の集落の発見は、遺跡の内容に新たな事実を書き加えることとなった。以下、各時代ごとに調査成果をまとめたい。

１．弥生時代

今回の調査では、弥生時代の遺構・遺物を確認することができ、楠遺跡に弥生時代の集落が存在することが明らかとなった。検出した遺構は、土坑・溝など少なく、実態の解明のためには今後の周辺の発掘調査による資料の蓄積が必要である。

（１）出土土器の時間的位置付け

出土土器は、遺構・遺物包含層出土のものとも時期差を示すものはなく、同一時期の所産と考えられる。これらは、器種等に若干偏りがあるが、弥生時代中期～後期の過渡期を示す資料である。出土土器には櫛描文・凹線文を施すものが少なくなる。Ⅰ区土坑１出土の器台（１）や長頸壺（８）などに施された櫛描波状文も、種描な印象を与えるもので、回転台を駆使して施された中期後半の同文様とは異なっている。同器台に施文された沈線文も、中期後半の凹線文の退化したもので回転台を使用したとは考えられない。このほか、後期以降に認められる記号文をもつ土器(23)がある。

器種的には、中期土器様式に通有のものがほとんど認められず、長頸壺や小型の短頸壺など後期土器様式（畿内第Ⅴ様式）に通有のものが認められる。一方、畿内第Ⅴ様式に認められる右上がりのタタキ目をもつ土器はない。高杯には屈曲して上方に立ち上がる浅い皿状の杯部をもつものが主体となる。屈曲部は外面の稜線がシャープなものと、やや甘いものがある。前者は後述の後期初頭の資料に一般的で、後者は中期末に位置づけられる生駒西麓第Ⅳ様式新段階[1]（東大阪市西ノ辻遺跡Ｎ地点溝上層・若江北遺跡SD556溝・SD560溝出土資料）に認められ、弥生時代中期～後期の過渡的な様相を良く示すものとなっている。このほか、屈曲して大きく外反する有段の杯部をもつ高杯は、「結合上器」等と呼ばれており、後期初頭に出現する形式である。広口壺は、垂下口縁の中期生駒西麓型の無文化したものに限定される。口縁端面に竹管文を施すもの(14)があるが、同様なものは後期初頭の資料に認められる。

以上、個々の土器について所属時期の検討を行ってきたが、中期的な属性をもつものが若干認められるものも、大部分は後期（初頭）として理解すべきものと考えられる。ここで同様な様相を示す資料を周辺地域で探してみると、大阪府高槻市古曽部・芝谷遺跡Ｓ12竪穴住居跡、豊中市新免遺跡SH-10竪穴住居跡、八尾市亀井遺跡SD-４・６・12・14、SX-03、奈良県田原本町唐古鍵遺跡第13次調査SD-05溝下層、第19次調査SD-208第８層出土土器などがあげられる。これらは、各地域で、後期初頭に位置付けられている資料である[2]。北河内地域では、この時期の良好な資料の報告例は知られておらず、本資料は当時期の基準資料となろう。

また、高杯(11)・(15)や鉢（２）は近畿地方の同時期の資料には認められないもので、類例は中部瀬戸内地域に求められる。これらの土器には、口縁部に横ナデ手法による調整が多用されている。同様な手法をもつ甕(12)・(17)も同地域の影響を受けたものと思われる。当該期の中部瀬戸内系土器については、大阪湾沿岸地域を中心に近畿地方での報告例が増加している。これらの中で、胎土中に細粒の角閃石を含み明茶褐色の色調を示すものについては、香川県高松平野（西部）で製作されたものの搬入品であることが判明している。今回の調査の出土土器は、いずれも黄灰色～橙灰色の色調を示し、高松平野産とされるものは含まれていない。

（2）青銅器鋳造関連遺物

今回の調査の最大の成果は、土製鋳型外枠および高杯状土製品という青銅器の製作に関連する資料を得たことである。弥生時代の青銅器の製作に関わる遺物については、金属を溶解する際の容器となる「坩堝」・坩堝の温度を上げるため空気を強制的に送り込む「輸」の羽口（送風管）・溶けた金属（湯）を坩堝から取り出して鋳型に注ぎ込むための容器である「取瓶」・彫り込んだ型に溶けた金属を流し込み冷やして金属を固めて製品を製作する「鋳型」が、北部九州・近畿地方を中心に出土している。この中で、鋳型については石製品を中心に比較的多くの出土例が報告されている。

一方、その他の道具類については、出土遺跡が限られている。特に、坩堝・取瓶と考えられる遺物については、近畿地方では奈良県唐古・鍵遺跡、兵庫県玉津田中遺跡、大阪府西ノ辻遺跡（坩堝）の出土が知られているにすぎない[3]。この中で、唐古・鍵、玉津田中・楠出土例ともに椀状の容器部分の外側に突起をもつという共通点をもつ。また、唐古・鍵、楠出土例には高杯状の脚部をもっている。玉津田中出土例はこの部分が欠損しているが、同様な脚部をもっていた可能性がある。もし、そうならば、広く近畿地方で高杯状土製品を取瓶（または坩堝）として使用する共通性があったことがわかる。

今回出土した土製鋳型（外枠）には、青銅器鋳型の彫り込まれた真土の部分が残っておらず、鋳造された製品（青銅器）を特定することができない。この中で全体の形状のわかる（1）・（2）は小型で、鋳造された製品については、現在知られている弥生時代の青銅器の中では銅鏃の可能性が高い。銅鏃の鋳造方法については、一度に数個の銅鏃を鋳造する連鋳式の方法が判明しており、石製の鋳型が福岡県春日市須玖坂本遺跡[4]で出土している。また、近畿地方では鋳放しの未製品が大阪府豊中市穂積遺跡・岸和田市下池田遺跡等で出土しており、唐古・鍵遺跡出土の割竹形の土製鋳型外枠がこの鋳型と推定されている。こうした技法で量産された銅鏃は、比較的小型で簡略な形態をもつ。

一方、弥生時代の銅鏃には、これらの実用品より大型で精巧に作られたものが存在する。こうした銅鏃は1個づつ鋳造（単鋳式）されたと考えられ、北部九州では福岡市井尻B遺跡で単鋳式の石製鋳型が出土している[5]。本例も同様な単鋳式の銅鏃鋳型となると推定される。

小破片の（3）・（4）も同様に鋳型外枠となると推定されるが、（1）・（2）より厚みがあり、連鋳式の銅鏃鋳型か、銅鐸や武器型祭器（銅剣・銅戈）などのより大きな青銅器の製作に使用されたと推測される。今回出土の高杯状土製品の容量は、銅鏃のような小型品の製作には有り余るもので、遺跡内で大型の青銅器の生産も行なわれていた可能性がある。

さて、近畿地方における弥生時代の青銅器鋳造関連遺物は、奈良県唐古・鍵遺跡や大阪府東奈良遺跡、鬼虎川遺跡など長期に継続する規模の大きな集落遺跡で発見されてきた。すなわち弥生時代の青銅器生産は、こうした各地域の中心的な集落（拠点集落）で行なわれていたと理解されていた。これは、青銅器の生産にあたって、原材料の確保、高度な技術の蓄積などの様々な問題があり、こうした問題を解決し青銅器の生産を行うことができたのは、各地域の生産・流通のネットワークの核となる集落遺跡と考えられたのである。

今回、青銅器鋳造関連遺物が出土した楠遺跡については、弥生時代の集落遺跡の中心部となる居住域の実態は不明である。今回の調査成果では、弥生時代の遺構の密度は希薄で、出土遺物量も少ない。上記の検討のとおり出土土器は後期初頭の極めて短い時期の所産で、調査地では中期後半以前あるいは後期中頃以降の時期を示す土器は認められず、遺跡の存続時期は短期間と判断される。この事実については、「楠遺跡が短期間の小規模な集落遺跡であった」とする解釈と、「今回の調査地の周辺に未発見の大集落遺跡が存在し、今回の調査地はたまたまその一部を調査したに過ぎない」とする解釈の二者が成立すると思われる。奈良県唐古・鍵遺跡あるいは大阪府東奈良遺跡では、青銅器鋳造関連遺物は集落の南

(南東）部の限られた範囲で集中的に出土しており、限定された区域に青銅器の工房が営まれていたと想定されている[6]。この説に従うと、今回調査地の北西側に集落の中心部分が想定される。ただし、唐古・鍵、東奈良両遺跡とも青銅器生産区域でも他の時期の遺物も豊富に出土しており、楠遺跡のように青銅器生産の時期に関わる遺物だけの出土とは異なるようである。

前者の解釈をとると、小規模な集落で青銅器生産を行っていたこととなり、従来の弥生時代の青銅器の生産・流通のありかたと異なったモデルを想定しなくてはならない。今回の調査で見つかった遺跡の示す後期初頭という時期は、集落遺跡の消長をはじめ様々な考古学的事象の変化が認められる、いわゆる時代のターニングポイントとなる時期であり、楠遺跡の解明にあたってはそのような特殊な時代的背景も考慮しなくてはならないと思われる。

2．古墳時代

古墳時代の集落は、古墳時代中期～後期の時期に比定でき、これまで遺跡内での調査によって検出されている集落と同一のものと判断され、集落の面的な広がりを確認することができた。既存の調査成果を総合すると、古墳時代の集落は南北250m以上に広がる大規模なものであることが判明した。今回の調査区では弥生時代以前には自然河川であった部分にも遺構が広がっており、自然堤防等の自然地形での微高地の利用にとどまらず、窪地となっていた場所も含めた面的な開発を行って集落を形成していることがわかる。

古墳時代の出土遺物としては、第１次調査の土坑２を中心に大量に出土して注目された初期須恵器・韓式系（軟質）土器が、今回の調査でもⅠ区溝６・土坑19から出土している。これらの遺構から出土している土器より古く位置づけられる古墳時代の土器の出土は無く、当遺跡での最古の時期に位置づけられ、楠遺跡の古墳時代集落出現（開始）の時期を示すものである。

須恵器には、特徴的な形態のものがいくつか存在する。溝６出土の須恵器坏(35)は、蓋受け部分が突出せず、体部外面にタタキ目が認められるもので類例が無い。定型化する以前のものと位置づけられる。同溝出土の把手の付く蓋(34)は、縦に２箇所の紐穴をもつ把手を縦方向に付けるもので類例を知らない。無蓋高杯は、土師器の高杯との形態の類似が認められる。脚中部あるいは脚端部に突線をもたない特徴は、陶邑古窯跡群出土の同様な無蓋高杯には認められない。前回の調査と合わせて楠遺跡ではかなりの点数が出土しており、この地域で製作されたものの可能性が高いと思われる。須恵器は、全体的に硬質に焼き上げられたものが多く、口縁等の端部までシャープに作られており、調整も丁寧に仕上げられている。形態的な特徴からは、陶邑古窯址群では大野池（ON）231号窯跡出土資料との類似が認められ、これらの須恵器の時間的な位置付けができそうである。

韓式系（軟質）土器は、実測可能な個体は少なかったが、かなりの量の格子目あるいは平行タタキ目が施された体部破片が出土している。器種的には、甕・平底鉢・甑などが認められる。

土師器の甕は、口縁端部の内面を肥厚させるいわゆる布留式甕の範疇で理解できるものと口縁端部を肥厚させずに丸くおさめるものの両者がある。胴部は長胴化したものが認められる。時期的には、布留式土器の最終段階として位置づけられ、米田敏幸氏の編年の「布留式期Ⅳ」に比定できよう[7]。上記の須恵器の時間的な位置づけと、矛盾するものではない。

統計的な数値を算出していないが、出土土器全体としては須恵器の比重が高いように思われる。土師器は器種的に甕と高杯のみとなり、貯蔵（壺・はそう）・供膳（坏・高杯・碗・器台）器種では須恵器化が進んでいる。前回の調査でも質量ともに豊富な初期須恵器が出土しており、当遺跡ではこの時期から多くの須恵器を所有（使用）していたと推察される。前回調査の出土資料の検討の際にも判明してい

たことであるが、上記の初期須恵器の特徴の部分でも指摘したとおり、楠遺跡出土須恵器には陶邑古窯跡群出土資料に認められない形態・特徴をもつものが多く認められ、付近にこれらの須恵器を焼成した窯跡の存在が指摘されている。当遺跡では前回の調査で陶製紡錘車および陶製土錘が出土しており、遺跡（集落）内に渡来人の居住が推定されており、彼らがこうした初期須恵器の製作に関与した可能性が高いと思われる。こうした在地での須恵器生産の結果が、須恵器の使用頻度の高さに関係していると思われる。

また、今回の調査では、滑石製の玉類や祭祀用模造品とともにこれらの石材と思われるものが数点出土している。遺跡内で滑石製品の製作を行っていたことが判明し、集落での生産活動の一端を明らかにすることができた。

以上、今回の調査では、弥生時代および古墳時代の集落遺跡について重要な知見を得ることができた。一方、遺跡の復元のためには、これまでに行なわれた発掘調査による情報では必ずしも十分とは言えない。特に、今回発見された弥生時代の遺構・遺物については未解決の問題点が多く、集落全体像との関係の中で考えなくてはならない部分が存在する。こうした問題が、近畿地方の弥生時代の青銅器生産の評価に直結することは、すでに述べたとおりである。今後の周辺での調査の成果が期待されるとともに、関連資料の蓄積を待って遺跡・遺物の検討を進め、実態の解明に努めたい。

註

1．濱田延充「生駒西麓第Ⅲ・Ⅳ様式の編年」『大阪府立弥生文化博物館研究報告』第２集　1993
2．濱田延充「畿内第Ⅳ様式の実像」『ヒストリア』第174号　大阪歴史学会　2001
3．三好孝一「弥生時代の青銅器製作技術」『青銅器の生産と弥生社会』平成12年度歴史シンポジウム資料　寝屋川市教育委員会　2001
（財）東大阪市文化財協会『西ノ辻遺跡―第５次発掘調査概要報告書―』2000
4．春日市教育委員会「福岡県須玖坂本遺跡」『考古学研究』第46巻 第２号　考古学研究会　1999
5．福岡市教育委員会『井尻Ｂ遺跡５』福岡市埋蔵文化財報告書第529集　1997
6．二好孝一「手工業生産と集落」金関　恕監修，大阪府立弥生文化博物館編『弥生時代の集落』学生社　2001
7．米田敏幸「土師器の編年・１近畿」『古墳時代の研究』第６巻　土師器と須恵器　雄山閣　1991

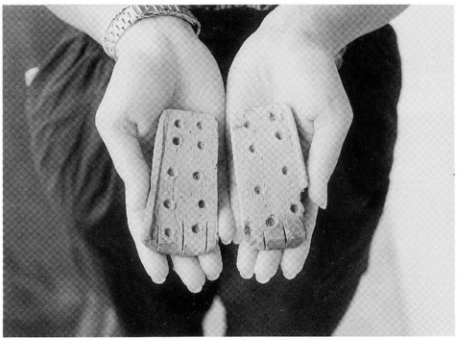
報告書抄録

ふりがな	くすのきいせき　Ⅱ
書　　名	楠遺跡　Ⅱ
副 書 名	共同住宅建設に伴う発掘調査概要報告書
巻　　次	
シリーズ番号	寝屋川市文化財資料
シリーズ名	25
編 著 者 名	濱田延充
編 集 機 関	寝屋川市教育委員会
所　在　地	〒572－8511　大阪府寝屋川市錦町８－13　TEL 072－838－0188
発行年月日	西暦　2001. 3. 27

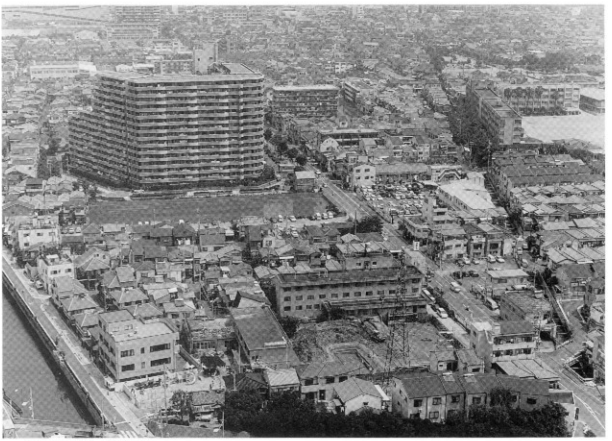
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
楠遺跡 (くすのきいせき)	寝屋川市 (ねやがわし) 石津南町 (いしづみなみまち)			34° 46′ 20″	135° 37′ 20″	2000 4.28～ 2000 6.30	700m²	共同住宅 建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
池田西遺跡	集落遺跡	弥生時代	土坑・溝	弥生土器・石器 青銅器鋳造関連遺物	
		古墳時代	土坑・溝 柱穴	土師器・須恵器 韓式系土器・製塩土器 滑石製模造品・玉類 馬歯・桃核	

図　版



図版1　検出遺構(1)



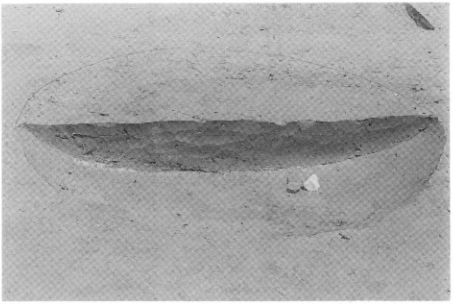
a．調査地遠景（南から）

b．調査地全景（南東から）

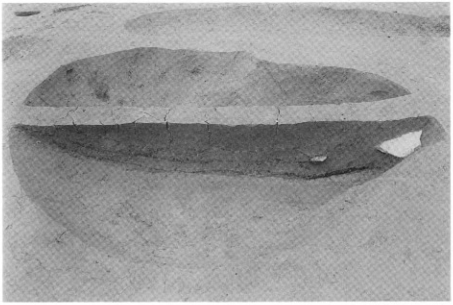
a．Ⅰ区全景(南から)

b．Ⅰ区全景（真上から：左が北）

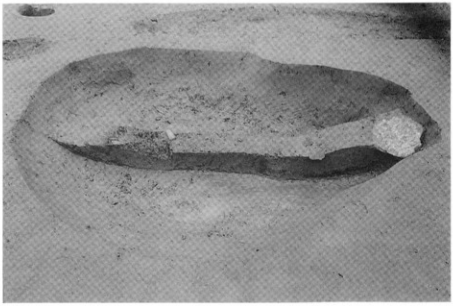
図版3　検出遺構(3)



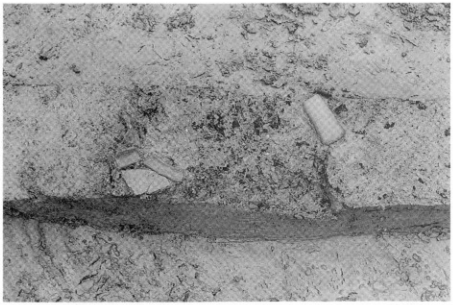
a．Ⅰ区土坑1
南側掘削状況
（南から）



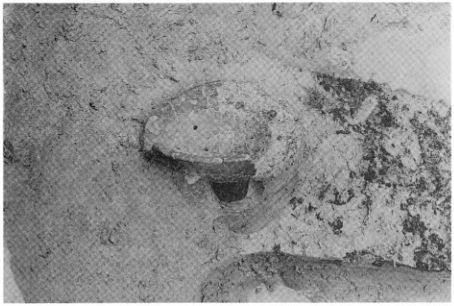
b．Ⅰ区土坑1
完掘状況
（南から）



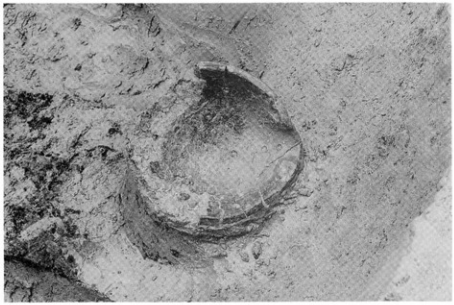
c．Ⅰ区土坑1
セクション部分
鋳型2出土状況
（南から）



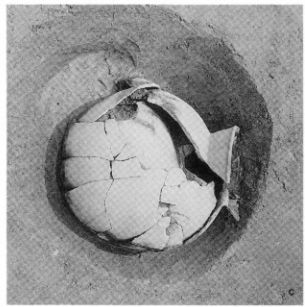
a．Ⅰ区土坑1
鋳型2出土状況
（左側は弥生土器5）

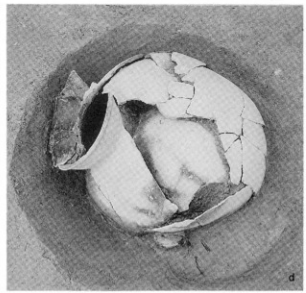


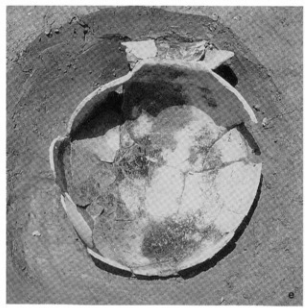
b．Ⅰ区土坑1
高杯状土製品出土状況
（北から）



c．同上
（真上から）

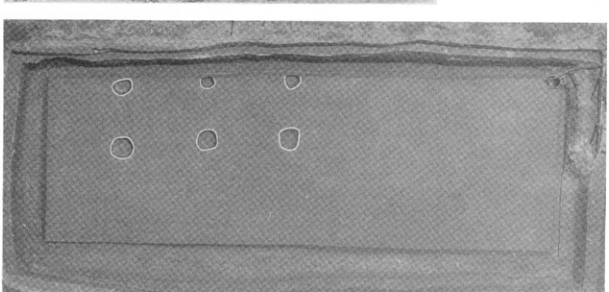




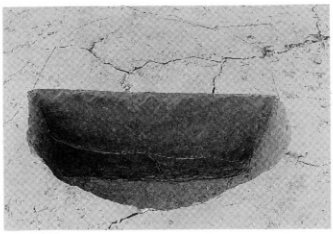


a．Ⅰ区溝３（北西から）
b．同上　弥生土器出土状況
c．Ⅰ区 P.33（真上から：上が西）
d．同上（南から）
e．同上（上部破片除去後）

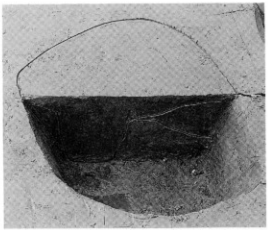
a．Ⅱ区全景(北から)



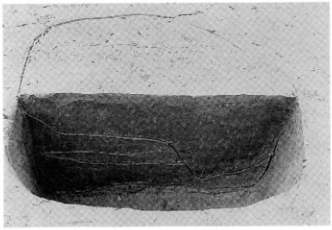
b．Ⅱ区全景（真上から：左が北）



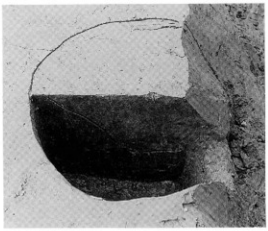
a．Ⅱ区 P−1



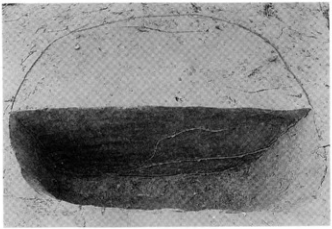
d．Ⅱ区 P−4



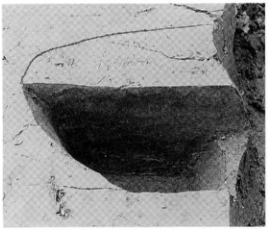
b．Ⅱ区 P−2



e．Ⅱ区 P−5



c．Ⅱ区 P−3



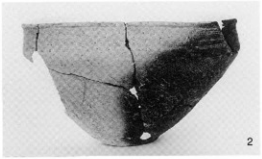
e．Ⅱ区 P−6

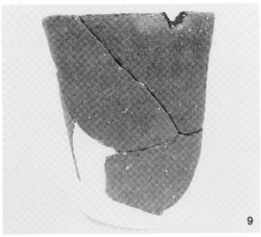
a．Ⅲ区全景（空撮時：北が下）

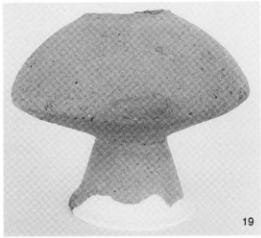
b．Ⅲ区全景（遺構完掘時：西から）

図版9　出土遺物(1)

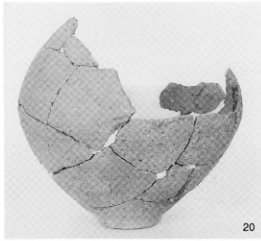
1


2


9


19

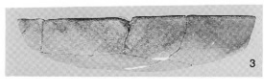
16

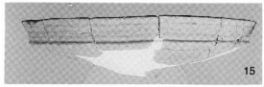

20

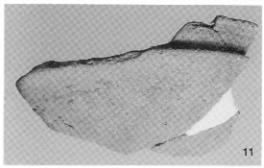
23

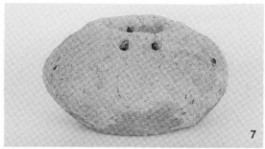
24

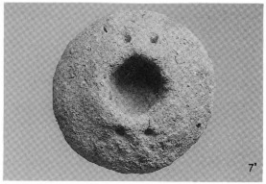
弥生土器

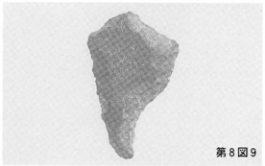


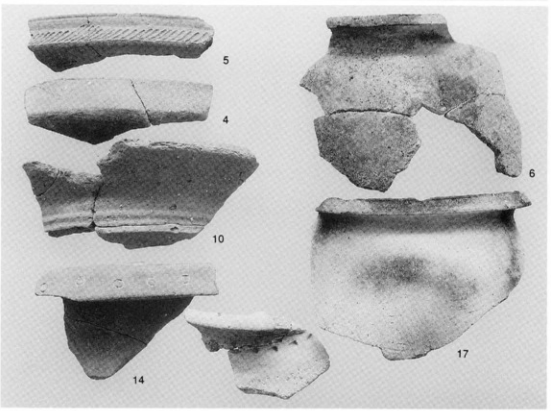




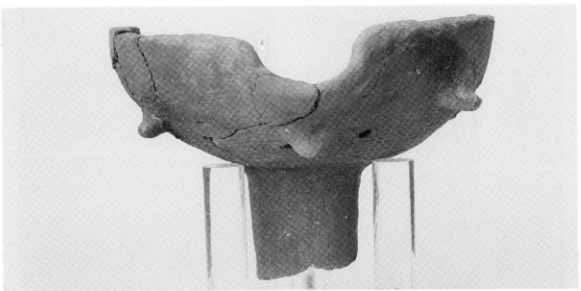




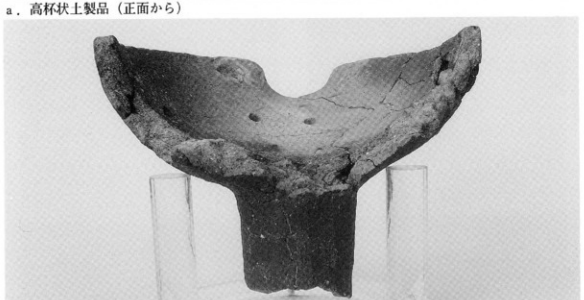




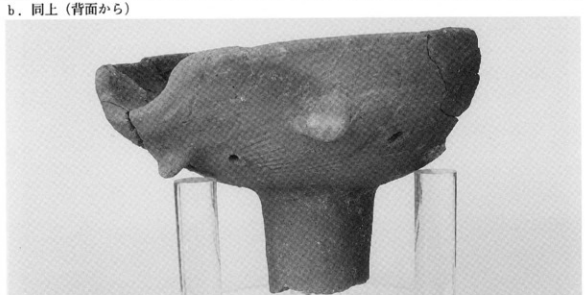
弥生土器・土製品・石錐



a．高杯状土製品（正面から）



b．同上（背面から）



c．同上（右側面から）

a．高杯状土製品（内面）

b．同上（外面）

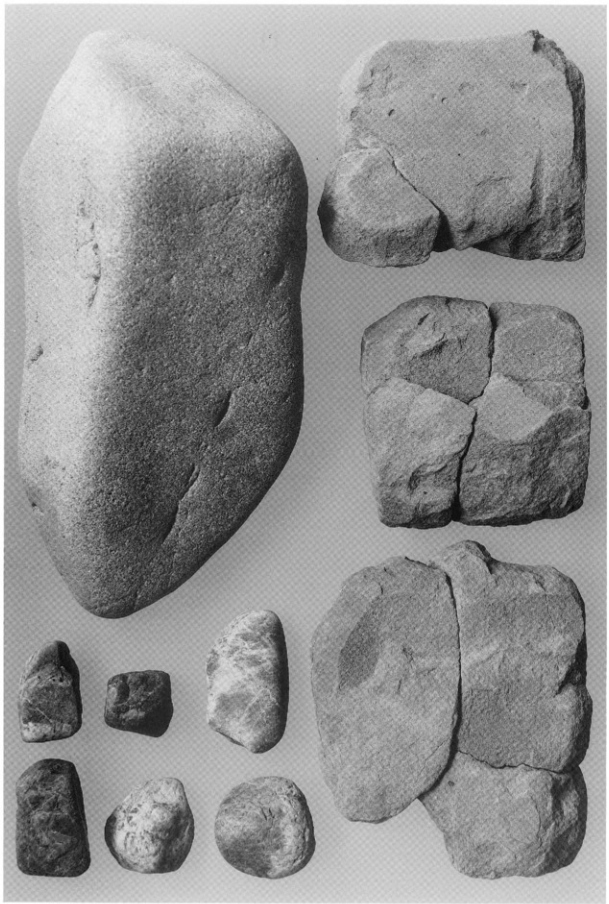
a．土製鋳型外枠1(左)・2(右)

b．同上（裏面）

c．同上（上部）

a．土製鋳型外枠（3・4）およびスサ入り粘土塊（5・6）

b．同上（裏面）

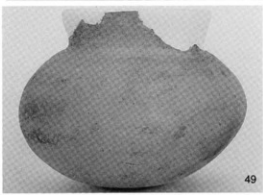


Ⅰ区　土坑1　出土石類

35

36

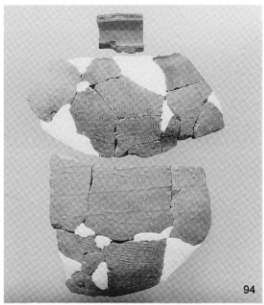
40

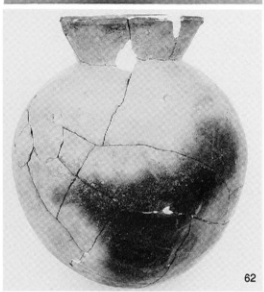

49

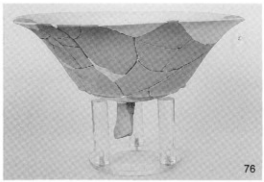
58

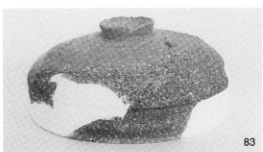
古墳時代土器

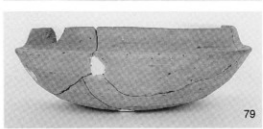
55


94

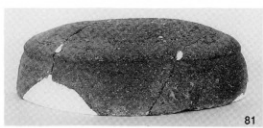

62

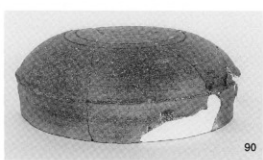

76


83

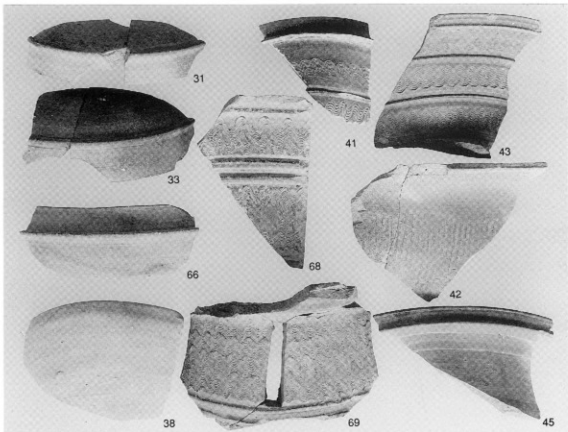

79

80

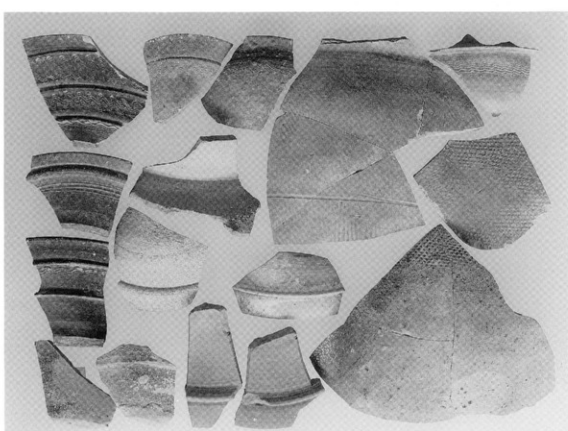

81


90

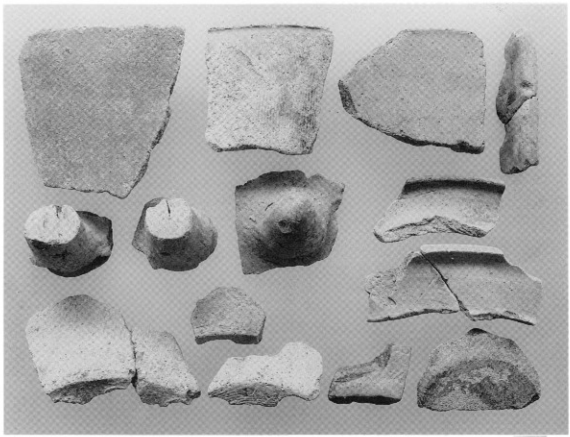
製塩土器



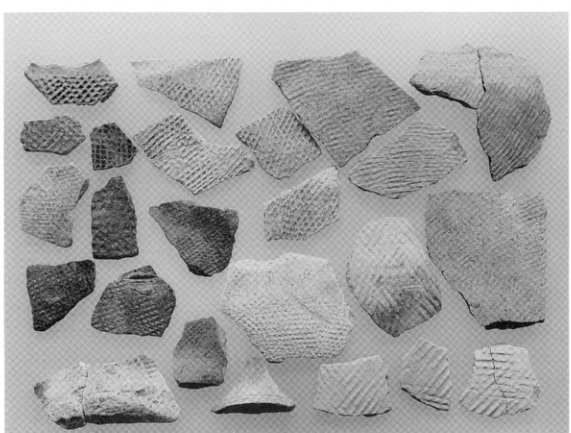
a．初期須恵器(1)



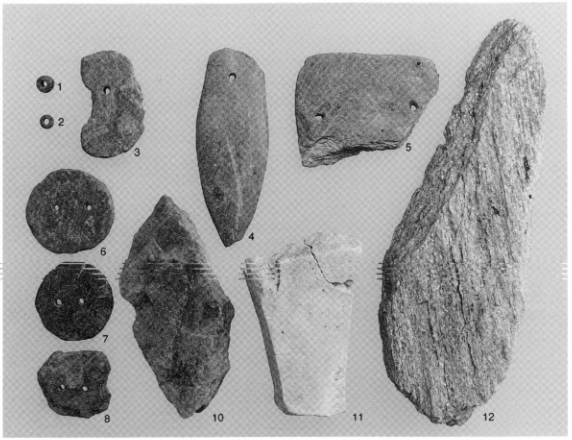
b．初期須恵器(2)



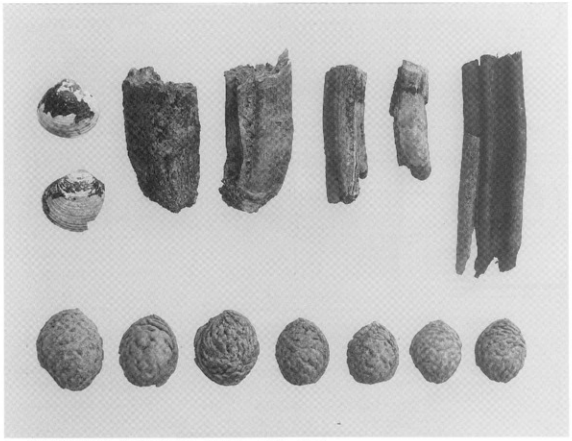
a．韓式系（軟質）土器(1)　甑・甕・平底鉢・土製かまど



b．韓式系（軟質）土器(2)　平底鉢・タタキ目のある体部破片

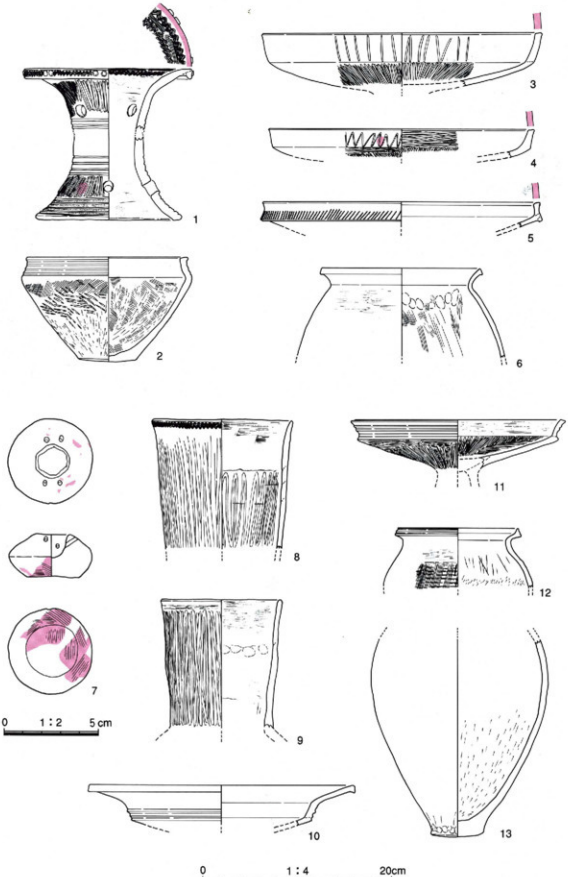


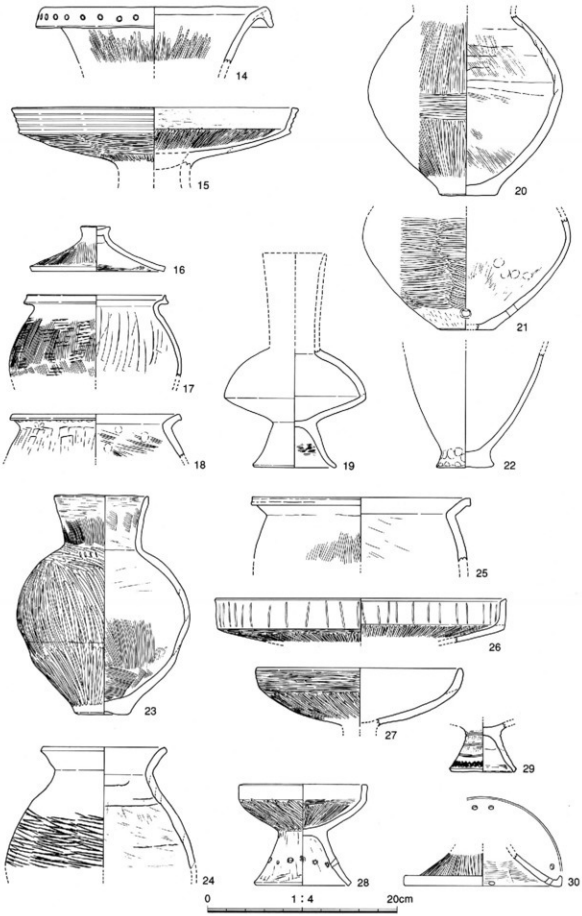
a．古墳時代石製品



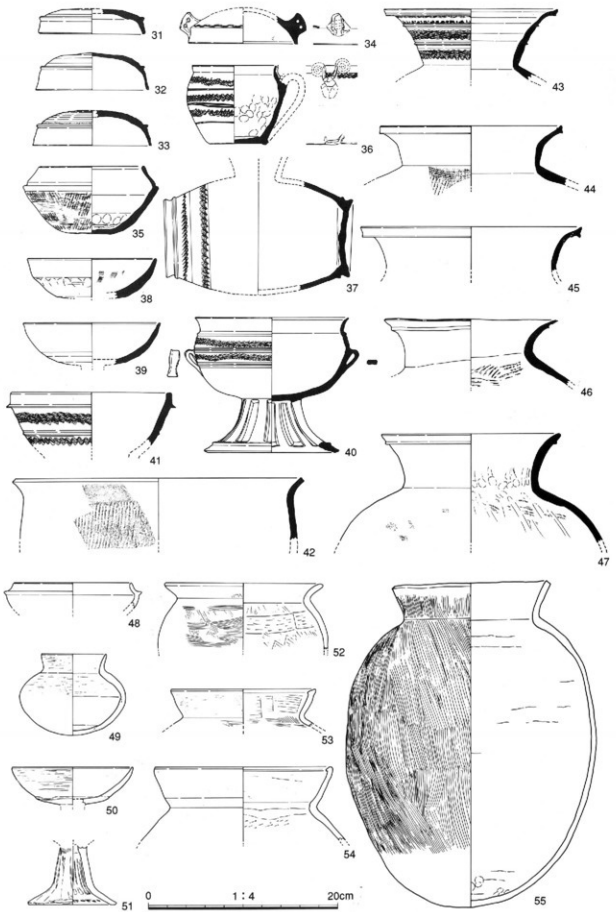
b．動植物遺存体（シジミ貝殻・動物骨・馬歯・桃核）

図版21　弥生土器・土製品実測図(1)

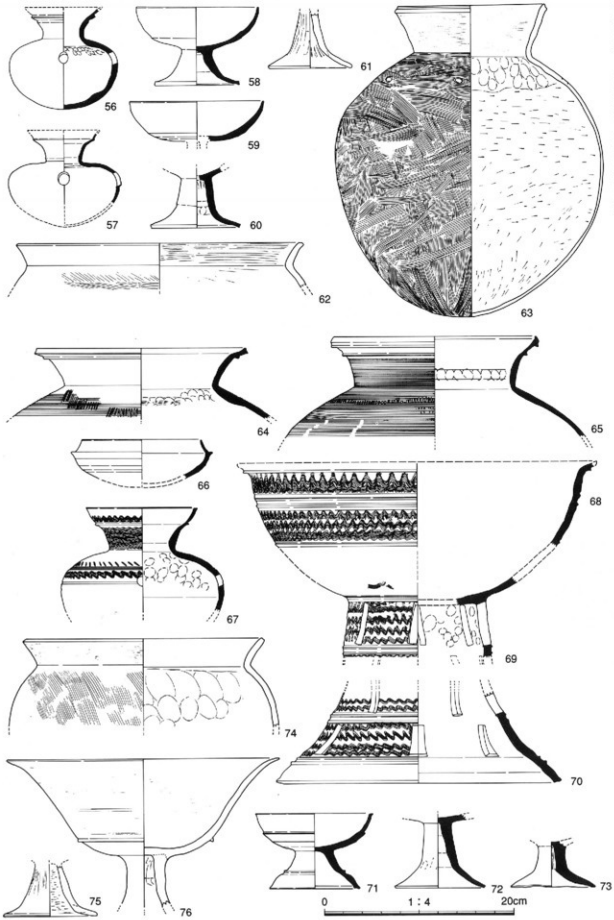



14
15
20
16
21
17
19
18
22
25
23
26
27
29
24
28
30
0
1：4
20cm

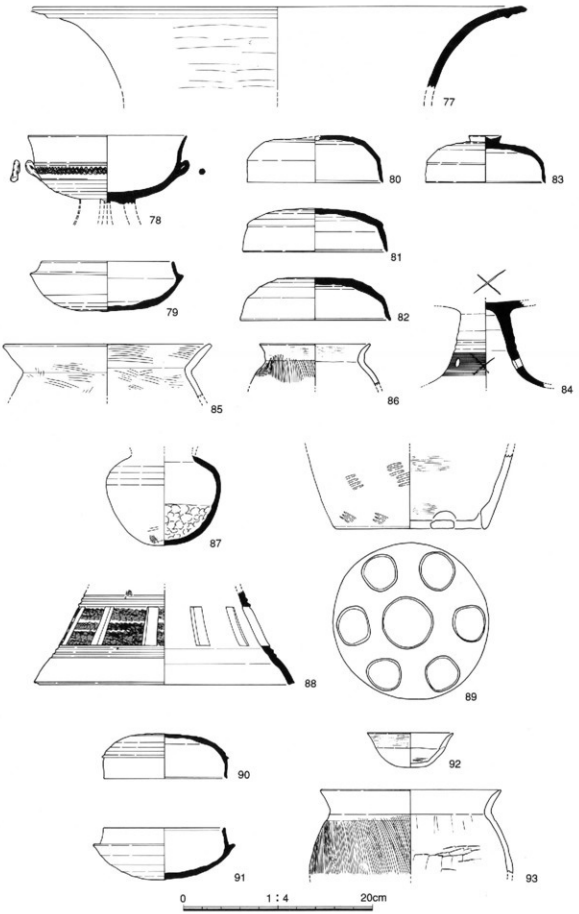
図版23　古墳時代　土器実測図(1)

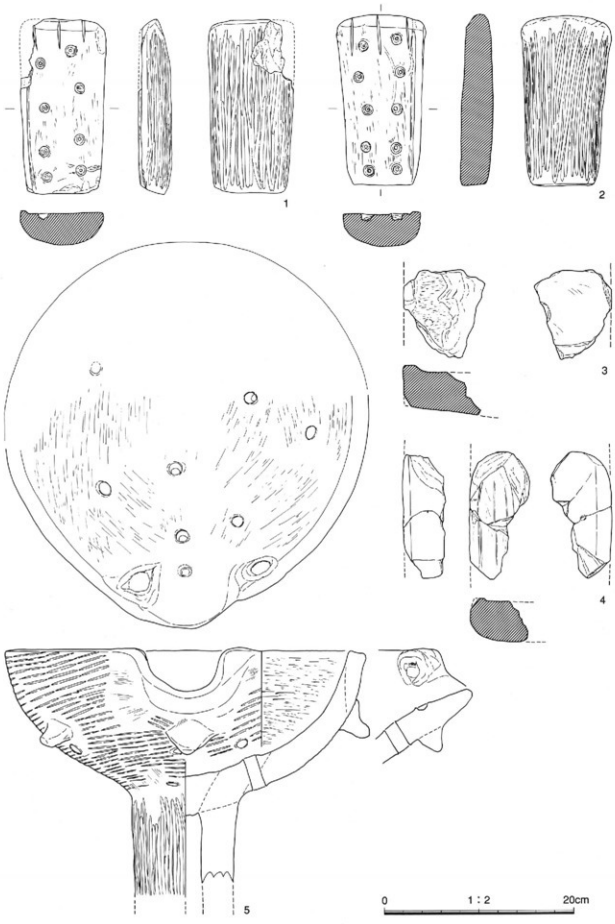


I区　溝6出土土器


56
58
61
59
57
60
62
63
64
65
66
68
67
69
74
70
75
76
71
72
73
0
1：4
20cm

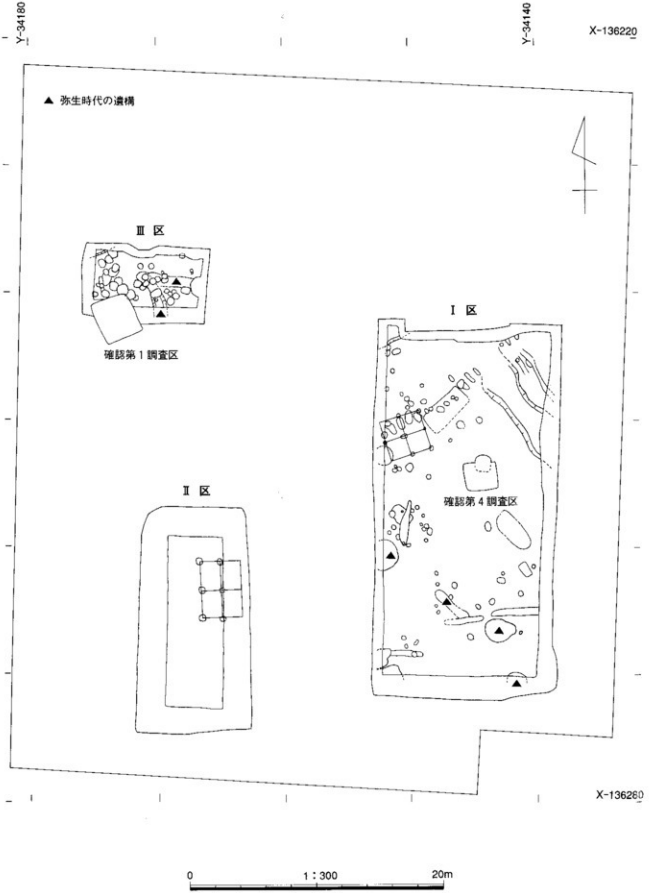
図版25　古墳時代　土器実測図(3)





土製鋳型外枠（1～4）、高杯状土製品（5）

図版27　調査区および遺構配置図



楠　遺　跡　Ⅱ

共同住宅建設に伴う発掘調査概要報告書

２００１．３
編集　寝屋川市教育委員会
発行　寝屋川市錦町８－１３
印刷　株式会社　日東印刷